

2015 年度
上半期報告書



新人合宿 槍ヶ岳山頂 2015/5/29

信州大学山岳会

目次

《新人合宿》…2

《夏合宿》…26

《個人山行》…43

4月

- ・北ア 白馬主稜
- ・北ア 五竜岳 GII 中央稜
- ・頸城 雨飾南尾根

5月

- ・GW 山行 北ア 五竜～白馬
- ・GW 山行 北ア 五竜～爺
- ・GW 山行 北ア 燕～蝶ヶ岳
- ・北ア 西穂高岳
- ・北ア 雄山東尾根

6月

- ・奥秩父 大荒川谷
- ・北ア 錫杖岳
- ・北ア 白馬三山
- ・北ア 燕～常念
- ・北ア 爺～鹿島槍
- ・北ア 有明山曲沢
- ・中ア 檜尾～木曾駒
- ・南ア 鳳凰三山
- ・南ア 仙丈～甲斐駒
- ・南ア 尾白川鞍掛沢・乗越沢

7月

- ・奥秩父 竜喰谷・大常木谷
- ・奥秩父 鶏冠谷左俣
- ・奥秩父 釜ノ沢
- ・頸城 妙高～焼山
- ・八ヶ岳 大同心
- ・八ヶ岳 八ヶ岳～蓼科山
- ・北ア 錫杖岳
- ・北ア 南岳～西穂
- ・北ア 白馬～唐松
- ・北ア 笠ヶ岳

・北ア 前穂北尾根～明神主稜

・北ア 裏銀座

・中ア 木曾駒・正沢川細尾沢

・中ア 奥念丈～南駒ヶ岳

・中ア 木曾駒～空木

・南ア 仙丈～甲斐駒

・南ア 悪沢～赤石 (丸山)

8月

・【サマテン】北ア 明神東稜～明神主稜

・【サマテン】北ア 前穂北尾根 4峰正面
壁・松高ルート

・【サマテン】北ア 前穂北尾根 4峰正面
壁・松高ルート

・【サマテン】奥穂南稜、ジャン飛驒、明
神主稜

・頸城 明星山

・夏縦走 北ア北上

・夏縦走 北ア南下

・夏縦走 南ア北上

・夏縦走 南ア南下

9月

・奥秩父 釜ノ沢

・谷川連峰 白毛門沢・万太郎本谷

・谷川連峰 湯檜曾本谷

・奥利根 利根川本谷

・1年縦走 北ア 梅海新道

・1年縦走 北ア 裏銀座～表銀座

・北ア 北鎌～北穂東稜

・北ア 後立山縦走

・北ア 北穂東稜

・北ア 明神主稜

・北ア 日本海～上高地

10月

・北ア 前穂北尾根～明神主稜

・北ア 劔岳早月尾根

・北ア 奥穂南稜

《事故報告書》…103

・6月爺～鹿島槍山行滑落事故

《新人合宿》

2015年度新人合宿

日程：2015/5/24～30

メンバー：会4)CL小林 荒川 片野 会
3)SL塩谷 内田 加藤(穂) 蒲澤 菊田
会2)植野 大槻 河村 城田 長谷川
松橋 山下 渡部 会1)稲垣 小笠原
小柳 会原 辛島 小山 鶴見 前田
村上 藪内 山口

行程：

5/24 BOX=島々谷入口～南沢～徳本峠小屋

5/25 徳本峠小屋～明神分岐～横尾 B.C

5/26 B.C⇔涸沢 《雪上訓練》

～28

5/29 B.C⇔槍ヶ岳 《槍ヶ岳アタック》

5/30 B.C～小梨平下山

記録：

5/24(1日目)

5:30BOX 集合 6:00 北門発 6:30 島々谷入口
7:05～7:20 出発 12:20～12:55 岩魚留
小屋 14:50～15:10 九十九折り開始点
17:30～18:05 徳本峠小屋

今年は北門からタクシーに乗ったので
駅までの歩きは無かった。人数が多いた
め3隊に分けて出発。1年生は初めて背
負う重さということでペース配分等に気
を遣う。昨年転落があった丸木橋は1年
生を空身で渡らせるなど対策をとった。
今年は南沢に残雪が多く、九十九折りの
手前で渡渉点を探す等ルーファイに時間

がかかる場面もあり、全隊が到着したの
は18:00過ぎとなった。今年は雨には見
舞われなかったが、その分暑く、1年生が
脱水症状や熱中症にならないよう配慮す
る必要があった。

5/25(2日目)

5:30 起床 7:25～7:35 出発 9:25～9:45 明
神分岐 11:40～12:55 横尾 B.C

徳本峠からB.Cまでの移動日。昨年は
雪渓が多く残っていたが、今年はこちら
には残雪はほとんどなく、ほぼ夏道沿い
に明神まで下った。明神以降は各々のペ
ースで横尾まで向かった。早くも関節痛
等を訴える1年生もおり、団装をばらす
判断はとんどが下りはじめだった。

5/26(3日目)

《本隊》

3:30 起床 5:00 出発 5:40 本谷橋 7:45 涸沢
ヒュッテ 8:10～12:10 雪上訓練 14:00 本
谷橋 15:20B.C

《前穂北尾根隊》

4:05 出発 5:40 涸沢 6:55 5・6のコル 8:30
3・4のコル 10:30 前穂高岳 13:40 涸沢ヒ
ュッテ 14:10 本谷橋で本隊と合流

本谷橋の奥にはまだ大きな雪渓が残っ
ており、橋を渡って対岸から行くのではな
く、その雪渓上を進んだ。端からはスノー
ブリッジがよく観察でき、1年生は雪訓初
日にして、新人ゼミで説明されたSBの本
物を間近に見ることができただろう。上
級生の人数に余裕が出てきたため、今年
はバリエーション隊が出た。1年生は雪訓
の合間に、吊尾根最低鞍部から涸沢カー
ル上部の急な雪面を降りてくる上級生を
見て、良い刺激を受けたのではないだろ
うか。この日の雪訓は、基本となる直登下

降、カニ歩き、クライムアップダウンを教えた。また、今年はこの日に涸沢ヒュッテにてカップ麺を頂いた。ごちそうさまでした。これからも雪訓で毎年お世話になるだろう。良い関係を続けていきたい。

5/27(4日目)

《本隊》

3:30 起床 4:40 出発 5:25 本谷橋 7:10 涸沢ヒュッテ 7:25~12:30 雪上訓練 13:35 本谷橋 14:15B.C

《北穂東稜隊》

4:30 出発 6:15 涸沢 7:15 東稜取り付き 10:00 北穂高岳 11:30 涸沢で本隊と合流

この日は2年生内で勝手に涸沢走りを行わないことを決め、3・4年生に伝えていないということがあった。リーダー会という場を有効に活用できていなかったことが反省である。この日はバリエーション隊は北穂東稜に行っていたため、雪訓をしながら北穂沢を詰めていくバリエーション隊の様子は雪訓をしながらでもよく見えた。1年生は2日目ということもあり、だんだん雪上歩行にも慣れてきたようだが、まだまだ腰が引けたり、正しい方向に蹴り込めていない様子も見られた。

5/28(5日目)

《本隊》

3:30 起床 4:40 出発 5:20 本谷橋 7:10 涸沢ヒュッテ 7:25~10:35 雪上訓練 11:15 本谷橋 12:00B.C

《北穂東稜隊》

4:30 出発 5:50 涸沢 7:50 東稜取り付き 8:50 北穂高岳 9:30 涸沢で本隊と合流

雪訓最終日。前日までの内容を仕上げもかねて復習し、グリ・シリセード、そし

てピッケルストップを教えた。ピッケルストップでは、最初は足を雪面に付けてしまったり、しっかり止まれない1年生が多かったが、ピックの刺し方や姿勢を改善していくことによって大分形が出来てきた。滑って止まっては登り返し、を繰り返した1年生は疲れたに違いない。雪訓の最後に、これまで行った訓練の意味の再確認と、これで完全に身に着いたと思わずこれからも精進すること、を伝えB.Cへの帰路についた。

5/29(6日目)

《偵察隊》

2:00 起床 2:50 出発 4:10 槍沢ロッジ 6:10 グリーンベルト 7:25 槍ヶ岳山荘

《本隊》

先発/後発 3:10/3:15 出発 4:10/4:15 一ノ俣 5:10/5:20 ババ平 9:10/9:35 槍ヶ岳山荘 9:30~12:25 穂先アタック 14:35 赤沢岩小屋 15:55 一ノ俣 16:45 横尾 17:00B.C

雪訓の成果を試す場でもある槍アタックの日となった。槍沢下部からすでに残雪は少なく、槍の肩直下は夏道の九十九折が見えていた。肩・穂先にも雪は無く、今年はFIXの出番は無し。穂先へは1年生の間に上級生が入り、落石への注意喚起等を行いながら登った。槍の穂先からの景色を見て1年生は何かを感じてくれただろうか?下りは鎖を使ってFIX通過の練習を行った。

5/30(7日目)

5:00 起床 7:30 出発 8:00 横尾 9:05 新村橋 《お墓参り》12:00 小梨平 12:30 上高地 アルペンホテルにて温泉

合宿最終日。お墓参りを終え、あとは歩くだけ。温泉で7日分の臭いに衝撃を受

け、小梨平でソフトクリームを食べるなどのんびりしてからタクシーで大学に戻った。

個人の反省

CL 小林滉平

<係りの反省：CL として>

CL として意識していたことは【各学年に役割を持たせること】である。これは合宿中だけでなく SAC の運営としても同じことになってしまうがいきなり変わるのも難しく、新人合宿は上級生の変化の場としても大きな働きを持っているものであると感じた。役割というの、教育される 1 年生、指示をする 2 年生、主導は 3 年生、それらの全体把握・最終決定を行うのが 4 年生といった感じになるのだろうか。2 年生は最初こそ戸惑っているように見られたが、中盤からはよく動いてくれた。3、4 年は人数も少ないため、実質同じような立ち位置にいるように感じた。結局 4 年生も体を動かして働くことが多かった。

また 27 人の最高責任者であるので当然事故面には気を使った。といっても全日の好天に大分助けられたのは事実である。槍にせよ徳本にせよ天気や雪付具合によってはもっと神経を使わされただろう。人数が多いとそれだけリスクが増える。今後さらに人数が増えても SL や他の上級生と協力して負担を分担してほしい。以下細かい反省

- ・途中入下山者の最終入下山時刻は決めていたが、連絡が不十分であった。メーリスに流すべき。
- ・雪訓で 3 年以上は初日以外 2 人いれば

見ることができた。初日は指摘することが多いので各隊分いた方が確実。

- ・バリエーション隊の留守への報告も疎かであった。しっかりと。最終合流時刻を伝える。
- ・計画書の書き方。自由がきいたが、その分様々な想定をすべき。(具体的には前穂北尾根の吊尾根最低鞍部下山など)

<個人の反省：小林滉平>

最後の新人合宿は CL として迎えることになった。去年は凍傷のため行けなかったので入山前にどんなものだったかを報告書などから思い出していたが、2 年ぶりで CL は少し不安であった。だが実際には頼れる仲間に助けられ、緊張しながらも楽しく行うことができ SAC は本当にいい団体だと感じられた。みんなありがとう。今回私は「任せると放置は違う」といった反省がでないようにふるまおうとした。口や手を出すようにしたのだ。4 年生ともなると動かないで当然と思われるが、下級生が見えていないところが見えた時はその場で言った方がいいこともある。つまらないことであつたら 2 年生なんかは「上級生に言わせることじゃなかった」と反省してくれるし、1 年生にも確実に伝えることができる。次にコミュニケーションの問題だ。エッセンや行動中も 1 年生と話してはいたが全員とはとれてはいなかった。親交を深めるのももちろん異常などを知るためにも必要なものなので、人数が多く大変だがこれを怠ってはならない。毎年曲者ばかり集まる団体で大変だが、先輩からの譲り受けで、「どんなやつでも愛せ」という言葉を忘れずにいきたい。

全学年が揃い自分が最高学年である。自分の言動に責任を持ち、行動で後輩に示しをつけていきたい。現役最後の新人合宿でやりきった感はあるが、悔いがあるとすれば同期も含め全員参加でなかったことかな。SACが大好きです！以上！

SL 塩谷晃司

本合宿では、各学年の役割、そして自分自身の役割について深く考えさせられた。全学年が揃い、新体制としてようやく動き出したところである。全員が歯車となり、円滑な活動をするために改善すべきことが多々ある。

指導などに関して、主体となるのは二年生である。このことは彼らも重々自覚していたし、実際よくやったと思う。しかし、二年生は主体となって動くが、運営責任を持つリーダーの駒でしかない。二年生同士で話し合うのはよいことだが、その結論は運営側の最終決定事項ではない。そもそも話し合うべきことがあるならば、リーダー会の際にすべきであるし、別で話し合ったのであれば、三四年生と共有すべきである。その間の連関がうまくいってなかったように思う。このことは、二年生のみ責任ではなく、SLかつ三年生である私が、積極的にコミュニケーションをとる努力をすべきであった。登山は判断の連続である。登山においてすべてを基本原則に則って判断できるわけでもないし、絶対的な判断が存在するわけでもない。経験や入手可能な限りの情報をもとに、様々なことを想定し、行動を選択していくべきである。二年生に足りないのは経験と想像力だと思う。当然、

初めからできるはずもないのだが、こういった経験を積み重ねることで、ベターな判断ができるようになるだろう。

今回は、バリエーション隊を数年ぶりに出した。上級生のレベルアップのためにも、今後も取り入れていけばよいと思う。ただ、隊が分かれるという性格上、様々なことを想定して本隊と密に連絡を取り合うべきである。また北尾根隊では下降に法政ルートを下降したが、雪崩などのリスクに関して十分に考慮すべきであった。奥穂を越えるのが面倒だという、心理的バイアスに影響を受けていたことは言うまでもない。

SLとしての役割はCLのフォローし、合宿運営の中心となることであるが、十分な働きができていなかったように思う。もっと機転を利かせ、全体をみるべきであった。指導の主体は二年生で、安全管理や全体の運営は三四年生の責任のもとに行う。これが今回の合宿のパターンであるが、今後は三年生がより積極的に会の運営にかかわっていく必要があると思う。現時点では、三年と四年の役割に曖昧さがあり、当然きっちりとした線引きができるわけでもない。そういった意味で三年は四年の存在にいわば甘えているところがある。もっと自分たちで完結させるというくらいの意気込みで活動していきたい。

これだけの大所帯で活動するうえで、もっとも重要なのはコミュニケーションだ。必要なことはしっかりと連絡を取り合い、自分の役割を自覚してそれぞれが会のために努力していこう。

会 4

片野亜紀

歩き始めたとき、ここにいるやつら全員下級生なのか、と少し身震いしてしまった。4 度目の新人合宿は、各学年がそろった新人合宿で、全員がデビュー戦の新人合宿であることをひたすらに感じる事ができたのではないかと。1 年生はもちろん、2 年生は上級生としてのデビュー戦、3・4 年もそれをまたまとめるという大役に不安を抱えながら挑んでいたはずだ。私らが 1 年生の時は、先輩はたった 5 人で 13 人も新人を引き連れて合宿に臨んでくれた。間違いなく恵まれている環境で、バリエーション隊も出せたり、各々が自分の役割を感じたりする中で、信州大学山岳会自体が新たなスタートを切ることができたのだろう。

去年は指導を会 2 に放任しすぎていたところがあったので、積極的に介入してよりよい雪上訓練になったと思う。しかし、会 2 と会 3 以上の上級生の間でコミュニケーションが取れていない場面もあり、1 年生を動揺させた場面も多くみられた。ここが今回の合宿で反省する部分と思う。上級生同士の関係を更に密接にしていこう。各学年、足りていない点がみえてきただろう。個人的な反省としても、私自身、4 年部員としてのふるまい方に悩んだ。2015 年度を盛り上げるため、自分自身の立ち位置、役割を明確にしていく。

女子部員も増えてきた。新人合宿では、去年からの試みである女子テントを設け、女子部員としてどうふるまうかなど話すこともでき、自分としてはこれからも取り組んでほしいところである。去年もかいたが、男女の差は埋まらない。しかし、埋める努力は

怠ってはならない。女子部員の扱いは、男子部員にとって難題だろうが、一緒に考えていきたいと、改めて感じた新人合宿であった。

会 3

内田祥平

3 度目の新人合宿。初めての歩荷を経験してもう丸々 2 年。会としても折り返し (4 年で卒業するならば) の年。今年は会 4 への準備期間だと思う。それは実力においても、統率においてもだ。会 2 から会 3 へ上がったばかりで自分には意識を変えようと考えているだけで、実力的には何も変わっていない。この新人合宿ではその第一段階として何をできるか、また合宿を終えて何ができたかをこのように文章にすることで振り返っていききたいと思う。今年も始まった合宿。会 1 は新しい装備を身に纏っているのに対して、会を上げるにつれ装備が使い込まれているのが一目でわかる。ガッシャーは学年順で並べば美しいグラデーションとなるだろう。一日目は例年通り徳本峠まで。会 1 の面々は個人差はあるけど例年通りの疲労。橋は去年の反省を生かし上級生が会 1 のガッシャーを運び、会 1 は空身で渡らせた。そこら辺の無線の連携はよかった。一日目のカレーがまずかったのは上級生の問題。エッセンがまずいのは死活問題。2 日目は明神までの下りが核心 (上級生にとってはある意味下りより横尾までの林道が核心だが)。年によって雪の付き方が異なり、偵察隊と本隊の連携及びに、本隊の上級生の 1 年生へのサポートが重要。今年は雪が少なくクライムダウンは要所要所でのみ使用。ここ 3 年間では 1 番楽だ

った。あとは横尾までは各々で。特筆しない。雪訓は4年生のご厚意により、3年生はバリエーションへ。1日目は前穂北尾根。メンバーは内田、塩谷、蒲澤。涸沢まで上がってから、5.6のコルへ。塩谷は昨年秋に行っているということで基本的には内田、蒲澤が先頭で。人気ルートということで踏み後はあるが、4峰は涸沢側からまくと怖い。3峰は蒲澤リード。チムニーではなく左のフェースのほうが登りやすいという情報もあるが、この時はチムニーから。バリエーション経験が薄い会3にとって貴重な経験となった。下降は吊り尾根から涸沢側へ懸垂からのクライムダウン。これも現場判断。2日目、3日目と自分は雪訓隊に合流。基本的に指導は2年生で、気になったところに口を出していた。今年は天気も良く、1年生の歩きも安定しているということで、槍ヶ岳アタック決行。1年生の一人が足を痛めていたので、自分是一緒にお留守番役。みんなの帰りを待ちがてら、エッセン準備。夜はパーティーだったのだが、横尾山荘の人にばれたため今年で最後に。来年の新人合宿について考える際に避けても避けられない問題に。今年の新人合宿はざっと振り返るとこんな感じであった。2年生は1年生への直接指導、3年生はその漏れの補修係。それに加えて個々のレベル(体力的にも実力的にも)の向上に努め隊を引っ張れるだけの実行力が必要だと思う。今回自分に足りないと思ったのは、積極的に隊を引っ張て行く能力。どうも4年生、同期に遠慮してしまう。自信がないのも原因の一つだと思うので、今年は積極的に後輩を週末山行などで連れて

いき合宿でも上級生の一助となりたいと思う。

加藤穂高

私は今回の新人合宿徳本越えの最初2日間しか参加していない。肝心の雪上訓練や槍アタックの様子を見ていないため内容の薄い反省になるかもしれないがまとめてみる。

初日、徳本峠への道は毎年歩くたびに重い荷物にへばりながら登った1年生の時の思い出す。いま隣を歩く新人があの辛さと同等のものを味わっているのだと思うと、私たちが1年生の変化にいかにつづいてやれるかが重要だ。去年の新人合宿、隊の先頭を任された2年の私は、後に続く重い荷物に振り回される1年に不安定な橋を渡らせ川に落とした。1年は何もできない。自分の見定めは全て当てにならず1年の目線でものを考えなければまた事故が起こる。その点今年の2年たちは、1年の顔をよく覗き話しかけ変化に気づこうと努力していた。私も3年目をむかえ行動中余裕がでてきた。1年2年の変化に気づいてやるのはもちろんのこと、隊を盛り上げるような存在になりたい。

単純に喋れば喋るだけ隊の雰囲気は良いようになっていく、と思っている。そんなわけでお疲れ気味の1年にばんばん話しかけてみるのだが、こいつと話すの初めてかと思うくらい普段の1年との絡みのなさを思い知る。離松組であることを言い訳にはできない。合宿、講習、総会と会員が集合する場でどれだけコミュニケー

ジョンをとれるか、どれだけ1年の力量を把握できるかが今後の課題だ。去年は長野市の一匹狼であることに甘んじて自分から情報収集しようと動かなかった。もっと1年に興味をもって知ろうとして動かないと私だけ置いてかれてしまうと思知らされた。

個人的に槍に行けなかったのが悔しい。雪訓メインの新人合宿であることは忘れていないが山頂に連れてきた1年の良い顔を見るのが好きだ。来年こそ全日参加したい。

菊田水樹

今年の新人合宿は、総勢30人以上の大所帯になってのものだった。それだけ全体の運営が大変になり、上級生ひとりひとりの役割が大きくなる。私はこの合宿には途中三日目から参加し、終了までの四日間BCに滞在した。直接一年生を指導するのは会二の役目だが、三年生以上は仕事がないかといわれるとそうでもない。落石や雪渓などの危険に対しては、当然だが会一のころに比べれば格段に気を配れるようになった。会二のころ会一に指導をしたという経験から、会二の指導で抜けているところがあればそれに気づけるようにもなった。今年の会一は全体として体力もあり、技術の習得が早いように感じた。涸沢までの道のりでは皆で声を掛け合ってとてもいい雰囲気合宿を過ごせたと思われる。一方自分は、入山のときの連絡など細かいところを怠ってしまった。合宿全体としてははげが人もなく、全日程行動できたのでとても充実したものだったと思う。ただ、槍ヶ岳からの

下山では二年生が雪渓の状況に気をとられすぎて一年生への気配りが疎かになってしまっている場面があった。色んなことに気を向けながら行動しなければならない集団登山の難しさだと感じた。様々なことに配慮できるようになるためには、まずは自己管理を十分にできなければならない。自分のことで精一杯になっていたのでは周りが見えなくなってしまう。私もまだ自分のことで精一杯になることがあるので、経験をつんで改善していきたい。

また、今年から三年生以上が中心になってバリエーションにいくということができた。涸沢周辺は北穂東稜と前穂北尾根に限られてしまうが、私は北穂東稜に行った。上級生オンリーだったのでとてもスムーズに進んで、天気もよく、満足した登攀をすることができた。次は、もう少し時期の遅いGW頃の前穂北尾根にも行ってみたい。

蒲沢翔

今年は新人が一時は18人も居たが、結局新人合宿に参加したのは10人だった。ただ残った10人は皆やる気があり、いい新人が残ったものだと思う。今年で3回目となる新人合宿は、初めて上級生として参加した去年よりも余裕をもつことができ、一年の様子や危険箇所などに眼を配ることができた。また去年までと異なる取り組みとして、一年の雪訓の合間に2つのバリエーションルートに行くこともできた。前穂北尾根や北穂東稜に行くことができたのはバリエーションの経験が少ない自分にはいい経験になった。

来年からは最上級生となる。今年の経験を生かして下級生をバリエーションに連れていくことができれば良いと思う。

会 2

植野侃太朗

2年として1年を率いて初めていく山行として、自分としては松本にいる身、1年を他の上級生よりも見ている身として他の上級生と1年のつなぎを出来ればと思っていた。

まず、1日目、徳本峠への登りについて、自分は後発隊のリーダーだったが、無線のやり取りに気をとられ、形骸化していた。また、無線から得た情報を共有することもできていなかった。無線は他の者に任せ、自分は先頭に立つべきであった。それから、1年をどこまで頑張らせるのか、見極めが難しいと感じた。例え、目的地まであと少しであっても押し通すのでは無く、1年の状態によっては休憩を取り、無理をさせないよう気を遣うべきであった。

そして、2日目、徳本峠からの下りは偵察隊として沢の積雪状況を調べに行った。反省としては、無線で送信する内容が殆ど上級生に指示されたものであったことだ。また、無線で通信する間隔が空いてしまうと、本隊がこちらが今どのような状況なのかが分かりづらくなるため、もっと頻繁に通信するべきであった。

3～5日目、涸沢での雪上訓練は一年への意識づけがいまひとつだった。教えた技術をどのような場面で使うのか、もし確実につかえなかったらどうなるのかをもっと意識させるべきであった。また、1年が疲れたことによる乱ればかりを指

摘してしまい、指導が単調になりがちであった。それぞれの細かい動きをみて、形を直すということが大切だと感じた。

6日目、槍ヶ岳ピストンについては、雪渓や落石などの危険を回避させる事に気をとられ、1ピッチが2時間になってしまった。危機管理だけでなく、1年の体調にまで気をつけるべきであった。また、穂先のピストン等において、1年に対する危機管理は良かったものの、自身の危機管理については甘いところがあったように思う。事故はおきなかったが、こらからも注意するべきである。

今回の新人合宿は会2になり、自分のことのみを考えていた去年とは違い、行動中もベースでも様々な事に気を遣う山行であった。ここでの反省点を生かして、夏縦走、夏合宿へと進んで行きたい。

大槻泰彦

2度目の新人合宿が終わった。今回は新人を迎え、その指導の中心として参加することになり、合宿前はやや緊張していた部分もあった。結果として得られた反省や感想を述べる。

まず第一に、初日に3年生に言われたことでもあるが、「1シーズンでも冬を経ているのといないのでは大きな差がある」ことを実感した。冬どうこう以前に1年生は30kgの荷物を背負うのは初めてだろうということは想像に難くなかったが、初日の林道歩きではつい自分のペースで歩きがちになってしまったりと、1年生の様子にしっかりと気を配れていない部分があった。初めて重荷を背負う1年生が無事に徳本峠を越えるために、自分基準

ではなく 1 年生の目線に立った気配りをもっとできたと思う。第二に、1 年生を率いて歩くための判断力の不十分さを知った。その最たる例が本谷橋周辺や槍沢での雪溪上のルーフアイである。スノーブリッジの脚の部分はどこなのか、間隔をあけるべきなのかどうか、など、まだまだ明確な根拠をもって判断できているとは言えない。そのときの状況に応じて最も安全な行動を選択できるようにもっと経験を積みたい。第三に、雪上技術を教えることの難しさを感じた。去年どうやって教わったかなど思い出しつつ 1 年生に教えていたが、うまく伝わっているのか、常に不安が残った。上級生が下級生を指導するというシステムが機能しなければ会全体にとって良くない影響があるのは言うまでもない。自分が出来ていることは当たり前、さらに他人にいかにかえられるか、というところに至るまで上級生としての力量が問われると思う。1 年生以上に自分が精進する必要を感じた。今合宿では、1 年生の中には重いザックを背負ってひたすら歩き、これの何が楽しいんだと思った者がいるかもしれない。しかし、槍の穂先から見た景色にきつと何か感じたのではないかと思う。今後の山行で生活技術などを教えるのと同時に、自分が思う山の良さ、楽しさを 1 年生に伝えていけたらと思う。また、今合宿では記録係を担当したが、その反省として、・隊分けがある場合、各隊の記録係をしっかり決めておく・記録をとるのは全員やっけて当たり前なことなので、記録係は医療缶の使用状況や傷病者の様子、各隊の記録等を集約し全体に共有する、という役

割を担えればいいのではないかと思った。

河村将人

2 回目の新人合宿が終わった。今回の新人合宿は去年の合宿と比べてより多くの経験をすることができた。新人合宿の目的は 1 年生の雪上歩行技術の習得であるが、2 年生にとっては指導の仕方、仕切り方を学ぶという目的もある。私はこの合宿で自分の仕切る能力の未熟さを感じるが多かった。特にそれを感じたのはテン場でのエッセンや幕営の時である。当然のことながら 1 年生は SAC として山に入るのは初めてであり、生活技術やルールなどゼミでは一通り学んではいるものの知らない。なので 1 年生にはこれでもかというほど細かく指示を出すべきであった。だが実際にはたぶんわかるだろうという気持ちで指示が足りず 1 年生が何をすべきなのかわからず戸惑っていて、上級生に追加で指示を出してもらったという場面が多かった。2 年生として去年の自分たちのことを思い出して支持を具体的に細かく出すべきであった。

雪上訓練においては見本を見してあげたり、一緒に歩行をやっけてまねさせたり、失敗例を見せたりという工夫が足りなかった。初日に注意を受け 2 日目以降意識しながら行ったが、歩行技術を習得しなかったり、間違ったやり方で行った場合どのような危険な状態になるかをイメージさせることができたかどうか心残りがある。また 1 年生に教える立場になったことで自分自身、歩行技術の足の運び方の意味などを再確認して考えるいい機会になったと思う。

この合宿で1番反省すべき点は自分自身の気が緩んでいたことである。上級生として1年生を叱ったりして気を引き締めさせる立場である自分の気が緩んでいて、忘れ物があったりと情けない姿を見せてしまった。またほかの2年生や上級生の方々にも迷惑をかけてしまったことを申し訳なく思う。気のゆるみは事故につながる大きな原因であるため上級生としての自覚を持ちこれからの山行、夏合宿へと向かっていきたい。

今回の合宿では1年生の指導、雪渓での先頭を歩きながらのルートファインディングなど初めての経験が多くあった。失敗や注意を受ける点もありいろいろ考えさせられる合宿であったと思う。この経験を忘れずに夏合宿に向けて山行を重ね着実にレベルアップしていきたい。

城田曜子

上級生として新人指導の主体となる立場になり、自分の実力が欠如している部分を改めて認識することができた。合宿準備から始まり、合宿の運営は想像以上に困難さを要するものであった。大きく目立ったのは、2年生間のコミュニケーション不足だろう。同じパーティにいなながらも、お互いの思考を共有せずに行動や指導をしていた。本谷橋以降の雪渓のルーファイ等、個人の独断で進行していたことが多かったように思う。また、雪上訓練でのトラバース歩行の足の角度についても統一しておらず、1年生に不安を抱かせてしまった。そして大きな反省は、2年生間での判断を、他の上級生に伝達するのが疎かになっていたことである。涸

沢走りの中止にいたっては2年生の勝手な判断にすぎず、さらにそれを他の上級生が把握していなかったことは良くなかった。

今合宿で初めて実際の山で新人を指導し、感覚的なコツを大衆化して人に伝えることの難しさを学んだ。普段の歩行にしても雪上訓練にしても、擬態語を用いて大雑把に伝えてしまうことが多かった。また指導が単調になりすぎてしまい、重要なことが重要なこととして1年生に伝わっていなかったことも反省の一つである。今回の合宿を通じて、改めて上級生としての自覚を持った。これから個人山行で下級生を連れていくにあたり、新人合宿で得た反省を生かしていきたい。

長谷川士門

今回の新人合宿についての私の反省・感想については係としてのものと個人的なものにわけて書きたいと思う。まず係としてであるが、今回は気象係として合宿に臨んだ。大きな反省としては係の仕事を理解していなかったことだ。今回は私たち会2にとって初めて下級生を連れてく合宿ということで後輩指導についてばかり頭がいつってしまったように思える。その結果として入山前に天気図を書き込み、合宿中の天気の動向を自らで予想するということをしていなかった。まず気象係がそういうことをしなくてはならないということをちゃんと知らなかったのが大きな問題であるが、知らなくてもそういうことをするべきではないかという考えに至らなかったことが、係の仕事を軽視していた証拠かもしれない。予

報に関しても知識不足が明らかであり、天気図を書けても簡単な予報しかできなかつた。もっとシビアな冬山などに行く際は何時から何時までだけは動けてそこを狙ってアタックするなり下山するなど、より精度の高い予報が求められてくるだろう。天気図が書けるということだけで満足しかけていた自分がいたかもしれない。レベルアップを目指して勉強していきたい。また肝心の指導面についてであるが、これは合宿全体を通して言えることかもしれないが、しっかり怒れなかつたように思える。会1には新人合宿までにちゃんと天気図を書けるようになってこいと言っていた。それにもかかわらず、全体としての出来はお世辞にも良かったとは言えないものだった。そこでしっかりと注意はしたものの、天気図作成と天気の予報をすることの重要性を伝えるとともに、もっと現状に危機感を持たせる言い方をすべきだったと思う。さらに、天気図を書かせる際に人数とラジオの個数の関係から、昨年使った場所で一斉にやることを考えていたが、まったく雨の想定をしてなかつた。結果として、2日目の天気図をとるときに小雨が降っていて少し濡れながら書くことになってしまった。この合宿では、会1に濡れに対する意識を持たせることも教えているというのに、この行為は指導する立場として非常によろしくなかつた。単純に想定が甘かつたのと、想定外の事態に柔軟に対処できなかつた。電波の入るテントもあつたし、考えればいくらでも対処のしようがあつた。あらゆる想定をして動くというのが山をやるものとして当然であるが、もし想定

外のことが起こっても冷静に対処し、最善の策をとれるようになりたい。

次に個人的な反省についてである。まず、前述したことであるが、指導面でしっかり怒れなかつたことがある。何も知らない会1が下界で教えられたことのみをもとに実際に行動することは難しいかもしれない。しかし、そこで甘やかすのではなくしっかり怒ってやらなくては、教えられる側も必死になれないかもしれない。本当に下級生のこと、そしてSACのことを考えるならば、もっと叱ってやらなくてはならなかつた。ただ全てに怒るのではなく、特に重要なことなどを意識させるように、メリハリをつけた指導が必要だった。落石注意などのコールや、雪訓での注意事項など命に関わることへ意識から、行動や生活をスムーズにするための意識など、教えていく内容にも優先度や重要度がある。とにかく指導をするという面において、まだまだ自分は意識が足りないと感じた。

松橋華世

去年と違い教える立場として参加しなければいけない初めての合宿はとても戸惑うことが多かつた。さらに授業の関係で雪上訓練の初日、二日目を開けることになってしまい一年生の指導を同期に任せってしまった。

一日目、徳本峠越えは去年初めて重い荷物を持って歩いてみて、歩きづらくて長くてとても大変だったイメージであつたが今年はその徳本はどこへやら。山岳会で初めて自分は成長したのかもしれないと思つた。しかし、1年生にとってはし

んどい徳本峠。上級生の1年はどこで落ちるかわからないから一步一步見てやるつもりでと言われていたので、いちいち注意喚起し気を配り、教える立場の大変さを知って自分を指導してくれる上級生の偉大さを知った。徳本峠を越えてから2日間授業の関係で合宿を空けることになったのだが、合宿5日目に再合流した際、本当に同期にありがとうと思った。一日目徳本峠でおたおたして突っ立てた一年が何を言われずともエッセンの準備をし米を炊き二日前には想像もできないような働きをしていた。さらに最終日となっていた雪上訓練でも基本的な歩きをある程度こなして疲れが見え中で懸命に頑張っていた。なにも知らない一年に一から生活技術や歩行技術を教えることはとても骨が折れることである。それを私がいらないあいだに何度も繰り返し教えたであろうことを想像してそれを主体となって頑張ってくれた同期には感謝しても感謝しきれない。

そしてやはり合宿で一番感動したのは今年も槍ヶ岳の山頂であった。一年前に初めて踏んだ槍ヶ岳の山頂は今年も言葉にできないくらいきれいで、その景色をみて一年生は訓練ばかりで大変な合宿の中で山に登ることの素晴らしさを感じてくれただろうか。その美しさに心動かされることがあっただろうか。これから辛いことをともに乗り越えていける仲間を得た気がした。

山下耕平

本年度の新人合宿は、初めて上級生として参加し、上級生としての責任と大変

さを実感することとなった。私は在松組であることから、装備係として合宿前から準備を進めてきた。まずは装備係としての反省を記す。

装備に関して、一番の反省は、無線の不調を見落としていたことである。大した無線に関する知識があるわけでないのに、簡単な受信・送信のテストをして、動作確認をしたつもりになっていた。さらに、BOX内にある電池残量をよく確かめずに、予備の電池として準備してしまったことも、大きな反省点だ。本年度の新人合宿は、数年ぶりにバリエーション隊を出して、本隊とバリエーション隊との連絡を密にするためにも、無線は必要不可欠な装備であったことから、今回の無線の不調は致命的であった。次年度以降は、装備係が装備に関する適切な知識を身に付け、新人合宿前より万全な準備をしていただきたい。また、食料を冷蔵庫に保存する際の網に関しても、前年度の装備係の反省をよく読んでいなかったため、忘れてしまい、結果、食料を動物に取られてしまうという事態となった。前年度の情報をよく確認することは、とても大切なことである。そのほかにも、装備テントを立てる場所の整地をしていなかったために、テントの底に穴を空けてしまったり、不十分な火器チェックによって、1日目より、火器が1台使えなかったりと、注意不足としか言いようのないミスが目立った。新人合宿の装備は、数も多く、把握も大変であるが、しっかりと責任をもってやるべきであると感じた。

次に、二年生としての反省である。一年生の時に上級生がやっていたように自分

もやってみたつもりであったが、一年生への注意喚起が不十分であったりとか、三・四年生を働かせてしまったりとか、動きが十分でなかった。雪訓に関しても、教え方が単調になってしまい、一年生にポイントを押さえて説明することが十分にできなかった。自分の知っていることをそのまま相手に伝えることはとても難しいことであるし、自分にとっては当たり前のことでも、相手にとっては全く知らないことであったりもする。上級生として、下級生を指導することは、相手の立場にたってやらないと、うまく伝わらないと感じた。今後は、この新人合宿の指導経験を生かし、一年生がこの一年で立派な上級生となれるように指導し、自分自身も三年生にふさわしい指導力と経験を身につけていきたい。

渡部優

【個人】

“新人”は“SACとして山をやる1年目”という意味で、新人と呼ばれる。当然、「知らなくてもしょうがないこと」は存在する。「それを知らしめる」「フォローする」のが上級生の仕事の一つであろう。反省会で1年生が言っていたこと、新人を見ながら思った「知らなくてもしょうがないこと」をいくつか挙げてみる。

- ・山の怖さ(落石,雪渓,滑落)
- ・組織としてのSAC(団体行動)
- ・靴擦れ
- ・歩き方セオリー
 - ・合宿エッセンのイメージ

前2つは、その重要性(リスクの大きさ)をちゃんと知らしめることができたか疑

問が残る。あと3つはフォロー仕切れなかった。

前者のアプローチとしては、丁寧な前説明・配慮をしたことを前提に「叱る」「理屈説明」がある。後者には「知識」「配慮」がある。

新人合宿以降の週末山行では、山行に合わせた上で以上と、それ以外の要素も意識して、これからも継続・改善していきたい。

【係り：エッセン】

・外に食料を置く場合は、獣害対策(ネット等)を忘れないこと

・茶袋は多め(最低必要数×~2とか)に入れる

・福神漬とかラッキョウとかご飯ですよとか、ご飯がすすむものを持っていくとよいかも

・翌日必要な水(飲み水含む)を、分配しておく都合が良い(水の管理も係りの仕事の一部として捉えると良いかも知れない)以上のことを、次回の合宿エッセン係の人には参考にしてもらいたい。

特筆してパーティーであるが、

・予算を決める(BBQ用串は明らかい無駄であった)

・全員がお腹いっぱいになるよう、量をちゃんと見積もる

をメインに、次担当する人に改善点を直接伝えていこうと思う。あれば、であるが。

【所感】

「考える登山」の充実感と難しさを、存分に味わえた山行であった。本谷橋が通過できず涸沢を詰めた時や、ババ平〜グリーンベルト間など雪渓通過の先頭を務める機会を意図的に求めていった。

- ・ 偵察
- ・ ルート選択
- ・ 間隔指示,維持
- ・ 時間管理

・ 待ち場所の安全確保(落石,クラック)
1ピッチとってみても、上級生には考えることが沢山ある。1つの山行となれば、なおさらであろう。まずは考えるべき論点を整理することから始め、今後の縦走に臨みたい。

個人的にはヴァリエーション隊の実現を目の当たりにして、新人合宿は非常によくできた合宿だな、と感じた。勿論新人のための大きいのが、2年生は上級生デビュー、3,4年生は1,2年生・全体の監督、そしてヴァリエーション経験をあげる機会、それがまた新人のモチベーションをあげるのに繋がり…と、「組織がうまく動き出す瞬間」というものを垣間見れた気がした。2年生という立場(完全に自由ではない、やるべき仕事、通すべき段階があること)を意識し、今後の活動に取り組んでいきたい。

会 1

稲垣翔

- ・ 行動 (移動)

1日目の徳本峠のつづら折りですっかりバテてしまった。原因としては体力が足りないこと、山歩きに慣れていなかったこと、経験したことのない歩荷の重さなどが考えられる。具体的には、最初の1ピッチで靴ひもの締め方があまく、翌日に靴擦れになる原因にもなってしまった。登りの歩き方も良くなかった。徳本の手前で沢を渡るまではつま先に体重をかけ

るようにしていたので、ふくらはぎに疲労が蓄積し余計につかれてしまった。足全体で体を支えるように歩くことを心掛けたい。

2日目ははじめて歩荷しながら雪の上を歩いた。ピッケルを装備して歩くのははじめてで、斜面の向きに合わせて持ち替えるのすらしっかり意識しないとできなかった。危険個所も度々現れて気の抜けない下りの徳本から降り切るとほぼ平地でかなり歩きやすくなった。

横尾～涸沢ピストン、槍アタックでは雪渓歩きを体験した。新人ゼミで学んだ基本的な雪渓の構造に加えて、氷の割れ目や落石を注意しながらの移動だった。日を重ねるごとに自発的に注意喚起などができるようになった。ただ、下りのときは真横よりもななめ後ろを注意する必要がある、そちらの方はまだまだ注意意識がたりていない。槍アタックの往路ではおよそ1ピッチほどリードを体験させてもらえた。どこを歩くのか、後続の様子はどうか等々歩いてみると考えることが多かった。復路はシリセードを利用した。雪訓のときと違ってガッシャーを背負った状態では思うように進まず、先輩に手伝われながらやっと下ることができた。最終日はひたすら歩くだけで、危険個所もとくになかった。上高地につくと観光客の数がすごくて、大きなザックを背負った。SACは目立つ集団になっていた。

一年生は扱わなかったが無線のトラブルも発生していた。電池の残量か設定の問題かは不明だが受信 or 送信のどちらかしかできないものがあった。またアンテナの紛失によって使えなくなるものもあつ

た。今後自分も使うことになるものなので、こういったことに対応できるようになる必要を感じた。

・雪上訓練

直(斜)登・直(斜)下降・トラバースは立ったままの姿勢がバランスを失いやすく、特に直下降は片足立ちの状態では腰を落とせず苦労した。クライムアップ・クライムダウン・カニ歩きは、進行方向・足元・斜面上方の三方向に注意を払う必要があった。これらの技術は柔らかな雪の上ではなく、硬い雪上を歩荷しながらという条件で必要とされるもので、疲労がたまっていても確実に行わなければならない。また、この雪上訓練中に二回の雪崩を見た。一回目はさらさらと雪が流れている程度だったが、二回目は涸沢中に轟音を響かせて大きく崩れ、雪訓をしている斜面の下方にも雪の塊が落ちてきた。

・生活

テントでの生活、MSR を使用しての調理なども初めてのことばかりだった。テントの中では限られたスペースで個装の管理、睡眠、火器の使用までしなければならない。とくに火器の使用(主に朝ラー)の流れを考えた個装の配置、片付け方が重要になる。テント外でのエッセンは日に日によくなっていった印象だった。新人合宿は人数が多いことからデカ鍋を使用する点で週末山行とは異なるが、エッセンの流れを学ぶことができた。米の炊き方やペミカンを使ったカレーなどの作り方も学べた。調理に共通してポイントとなるのは水の量で、下界との一番の違いだ

と思う。限られた水場で適切な量の水を汲んで無駄にしないように使うことが大切になる。

靴擦れが登山において重大な怪我として認識されるべきものであることも学んだ。行動の項で書いた通り一日目から靴擦れになり、きちんとした処置は二日目の夜だった。伸縮性のテーピングを用いた予防法と絆創膏の使用方法もそこで初めて教わった。個装で伸縮性のテーピングを持っていなかったのが大きなミスで、団装の医療缶を使わせてもらうことになってしまった。靴擦れにかかわらず怪我の傷口が化膿する可能性もあり、そうなった場合は下山することになることをよく認識しておく必要がある。

・気象

下界で3回ほど練習をしていたが、まだまだ足りなかった。まずは基本を押さえて(H,Lなど)しっかり描く。そのうえで予報できる知識をつけていく。これによってより適切な天気図の書き方が身に付くようになる。

～感想～

はじめての本格的登山、はじめての頂上、はじめての雪渓……様々なことを体験した。一番印象に残ったのは槍ヶ岳の頂上だった。天気にも恵まれたこともあってその日歩いてきた道、地形図でしか見たことのなかった尾根や谷そして多くの山々を観ることができた。今はまだ何もわからない初心者だが、これからもっと多くのことを学び、経験をつんであのフィールドを歩きたいと思う。「慣れた」と思っ

でも常に初心者の感覚を思い出しながらやっ払いこうと思っている。

小笠原一樹

私は今回の新人合宿の反省を行動、生活の2つに分けて行おうと思う。行動については初日に団装を崩してしまったことがあげられる。理由は高校の時から引きずっている腰痛が出たことである。症状がでることを予想して事前の情報共有や個装で湿布の準備はしていた。しかし、長期の山行では事後的な対策だけでなくテーピングやサポーターなどで痛みを出さない工夫が必要だと感じた。体力不足からくる姿勢の乱れも原因にあると考えられる。疲労により落石などに対する注意力の低下も起きるため、下界でのトレーニングは必須である。体力的な余裕ができることで一年生が毎年反省している落石注意や声出しも改善されていくがそれまでは意識的に体にすりこんでいくしかないと思った。もうダメだと思っても叫んだりすると結構登れたりするのでパーティ全体でその雰囲気共有していく大切さを槍ヶ岳アタックで感じた。次に生活ではエッセン時に何もしていない事があったので視野を広く持って、先を読んだ行動が必要だと感じた。猫舌で朝ラーを食べるのがとても遅いので水を入れるなどして早く食べられるようにしたい。生活技術をあげることで時間を捻出し行動に余裕を持たせることができるので週末山行で力をつけていきたい。

会原初美

新人合宿は私にとって“これから”を示し

てくれるものであった。山登りは全くの初心者で、なおかつ重い荷物を担いで登るということは全く未知の体験であり、想像することも難しかった。それゆえ新人合宿前は不安しか感じることはなかった。漠然とした不安を抱えたまま臨んだ新人合宿、冷静に振り返ってみたい。

1日目 初めて重い荷物を背負って山道を歩く、想像以上に登山道は歩きづらく足元に意識が集中してしまい先輩に何度も顔を上げろと指摘を受けた。重い荷物を背負っているとバランスが傾いたときに修正ができず、何度も転んだ。岩魚留小屋に着いたあたりから体力的に苦しくなっていた。それでもときおり感じる川のせせらぎや風に元気をもらった。最後のつづらおりに差し掛かると体力はほとんどなくなっており、かなりペースも遅くなってしまった。それでも先輩方や同期が声をかけ励ましてくれて背中を押してくれた。しかし最後の最後で団装をバラしてしまったのは悔しかった。自分で自分の荷物は運びたかった。やっ払いのことで登りきって達成感を得られるかと思ったがそんな暇はなく、すぐ団装をだし、エッセンの準備が始まった。自分が何をすべきか、何をすればいいかが全くわからず、正直なんの仕事をしたか記憶にない。それほどあたふたしていたのだと思う。しかし、上級生のリーダー会の間、会1でその日の反省をしていたときにふと見上げた空に輝く星に心奪われたのははっきりと覚えている。

2日目 徳本峠からの下山。山道の下りは体重移動と足元を見ることに必死で何度も転んだうえに、なかなか恐怖心が

拭えなかった。ところどころ小さな雪渓もあって初めて渡る雪のある斜面に苦戦した。私の不安定な足取りからの判断でまた団装をバラしてしまった。BCに行くだけだからちゃんと運ぼうと思っていたが、やはり体力がなかった。この日は比較的平坦な道を歩いていたが、1日目の疲労+靴擦れでしんどかった。

3日目 雪上訓練1日目 本谷橋から涸沢までの雪渓は歩いていてとても楽しかった。初めて生で見る雪渓、自分がその場に立っていること自体が不思議だったし、感動した。あの時の感覚、気持ちはいつ思い出しても気持ちがいい。楽しく登っていたが、途中から涸沢走りが始まった。名前からして言わずもがな、辛かった。雪斜面に岩が落ちてきたことを知らせるトレースがいくつも存在し、落石注意はとくに意識した。涸沢の小屋に着き、いよいよ雪上訓練が始まった。初日は直登、直滑降、トラバース、斜登高、斜滑降の5つを学んだ。常に、姿勢、目線、雪斜面に対する足の蹴り込みを指摘された。いかに少ない力を使って効率的に登っていくかを考えさせられた。

4日目 雪上訓練2日目 この日は涸沢走りはなかったが、3日目とはうってかわり涸沢の小屋までの歩きを楽しむことはできなかった。ただただ辛かった。まわりの景色を見る余裕はなかった。上級生に何度も顔を上げて歩けと注意を受けた。この日の雪上訓練では、カニ歩き、クライムアップ、クライムダウン、ピッケルストップを新しく学んだ。訓練は空身でやったが、実際は重い荷物を持ってやることを考えると気持ちが引き締まったし、

難しさも容易に想像できた。一番苦戦したのはピッケルストップだ。うまくピッケルが雪上にささらない、脇としめているつもりでも開いてしまう、体を捻るのが遅い、など多くの課題が残った。

5日目 雪上訓練3日目 最後の雪上訓練だ。今までやったことの総復習、加えてシリセード、グリセードを学んだ。この日はピッケルストップに重点をおいて練習した。前日同様思ったように体が止まらない。ピッケルで止まる感覚をつかむことがなかなかできなかった。最後にはだいぶましになったと言ってもらえたが、自分としてはもし滑落したときにストップできる自信が微塵もない。ピッケルストップの感覚が自分のものにできなかったことは悔いが残ってしまった。

6日目 槍ヶ岳アタック 夜中の2時起床から始まった。槍沢までの道のりは上級生とお話しながら楽しく登っていた。槍沢に入ると傾斜も厳しくなり、だんだん息も上がってきたし、足も上がらなくなってきた。きつくなってペースが落ちてくると気持ちの面でも辛くなってくるが、そんなとき上級生や同期の声掛けにたくさん励まされた。みんなに背中を押してもらってひたすらに登っていた。私は最初、殺生ヒュッテを槍の肩だと勘違いしており、殺生ヒュッテを目指して登っていた。殺生ヒュッテに着いた時「やっとなつた〜」と思ってふと上を見上げたら、もう1つ小屋が見える。あのときの絶望感は忘れないと思う。あそこで本当に心が折れた。思わず「もうやだー」と言ったのを覚えている。あの絶望感を味わえたことは今となってはいい経験だったと

思う。槍の肩から頂上までのアタックは楽しかった。だんだん頂上に近づいていくにつれてワクワクした。最後のはしごを登り終わったとき視界に広がる景色になんとも言えない気持ちになった。

7日目 河童橋まで帰る途中、OBの方々にお会いした。SACに流れている時間の長さや歴史やOBの方々の想いを感じることができた。背筋がシャキッとなった気がした。河童橋に着くと待ちに待った温泉。1週間の汗や汚れや疲れをいっきに洗い流す。最高に気持ちがよかった。上級生に買ってもらったソフトクリームは格別おいしかったです、ありがとうございました。

1週間を通して、体力不足を痛感せざるを得なかった。何日目であっても体力不足を感じた。まずは体力をつけなければ山は歩けない。荷物は持てない。上級生のように普通に荷物をもって山に登れるようになりたいと強く思った。加えて、私の初ピークは槍ヶ岳だった。初ピークが槍ヶ岳だなんて贅沢者だと言われたが、私にはその贅沢さがまだわからない。知識的にわからないことはたくさんあるが、感覚的にもわからないこともたくさんある。みんなと同じ気持ちや感覚を早く共有できるようになりたいとも思った。少しでも早く、足手まといにならないくらいの体力をつけたい、追いつきたい。これから私の山登りは始まるのだ。

小山悠太

合宿の始まるまえに、装備チェックやゼミの資料の読み込みに関して詰めがまかかったと反省しています。私は高校の

時山岳部だったので、それなりに経験と知識があると自分自身の力量を過信していました。新人合宿には生活と雪上技術の習得をメインにSACのやり方をみにつけようと臨みましたが、その他山の力も山岳会をやっていくにはまだまだ足りないことがわかりました。これからも上級生の行動をしっかりとみて学んで吸収していきたいとおもいます。今回は新人として合宿に参加しましたがこれからは会1として山岳会に貢献できるようになりたいです。

ここからは各日程の反省と感想です
一日目 島々～徳本峠

初めて体験する35kg以上のザックを背負っての行動でした。最初はすごく重くてこんなもの背負って歩ける気がしませんでした。ですが歩き始めると案外ガッシャーが体に馴染んできました。しかし、後半になればなるほどガッシャーは重く体が痛くなりました。徳本越えのラスト1ピッチでは疲れてあまり声も出せませんでした。集中力を最後まで持続させることが大切だと思いました。

二日目 徳本峠～横尾～BC

徳本のくんだりでははじめのほうで少しピッケルをもって雪上を歩きました。例年もっと残雪があり下るのに時間がかかるらしいので、来年会2になったときにちゃんと対応できるようにしたいです。上高地は何回か来たことがあったので楽しく歩きました。徳沢でアイスクリームをたべました。冷たくておいしかったです。ただ、すこし高いとおもいました。

三～五日目 雪上訓練

涸沢での雪上訓練はとても景色が良く

て気持ちよかったです。訓練自体は高校でやってきたものと若干違いがありましたが、基礎基本は同じだったので困惑なく訓練できました。合宿のまえは三日間もいらなとおもっていた雪上訓練でしたがやってみると三日という期間はとても短く一週間くらいあっても完全にマスターすることは難しいとおもいました。私がこの三日でやったところは基礎だけでありこれから実践できるようにまだまだ学習する姿勢が必要だとおもいました。

六日目 槍ヶ岳アタック

槍ヶ岳は高校時代からのあこがれの山であり目標でした。天候にも恵まれしい素晴らしいアタックができました。槍ヶ岳山荘から槍ヶ岳を仰ぎ見た時の感動、3,180mの頂に立った時の感情の高揚は、私の少ない語彙では言い表せないほどのものでした。同じ会 1 のなかには人生初めての山頂が槍ヶ岳になった仲間もいて、どんだけ贅沢なんだとおもいました。ただ、それができるのも SAC のしっかりとした運営能力や危機管理体制、三日間の雪上訓練などがあってからこそできるものだとおもいます。今回の新人合宿はとても充実したものでした。最後の反省会で小林さんに「これで 1 年生も SAC の一員だ」と言われた時はとてもうれしかったです。

前田達樹

今回の新人合宿で、自分はあらゆる面において未熟であること、山に対する危険意識が少なかったことを実感した。高校である程度の登山はしていたとはいえ、30 kg オーバーのザック、雪上での歩行、

SAC 流の生活技術等、初めてなことばかりであった。それ故に学ばなければならないことが多々あると痛感した。以下に反省を述べていく。

・徳本峠越えについて

途中で足が数回つってしまった。そのために隊のペースを止めたり緩めたりと、隊の方々に迷惑をかけてしまった。それを和らげる一つの方法として、しっかりと塩分補給や水分補給が重要であることを教えていただいた。また、終盤では体力的疲労により、周りを見る余裕があまりなく、進むことに精いっぱいになってしまった。これでは来年自分が先頭に立った時、ルートファインディングして進んだり隊の人々のコンディションを見たりするなど、相当難しいことだろうと思う。体力向上はもちろんだが、これからの個人山行で読図スキルも身に着けなければならない。

・雪上訓練及びそこまでのアプローチについて

涸沢までの雪渓歩きは、初めのほうは歩幅を合わせてしっかり蹴り込むことを意識するあまり、足元ばかりで周りが見えていなかった。これというのも、雪上での落石の恐怖や雪渓の構造上の危険箇所に対する危機意識が少なかったためであろう。雪上訓練に関しては、体重移動がうまくいかず、蹴り込みが弱いから雪上に体重を乗せきれず、それ故にまた蹴り込みが甘くなってしまう、ということが何度もあった。今回の雪上訓練では雪が柔らかく斜面も緩やかで条件としては簡単だが、それでもすべてを満足にできたわ

けではないので、本番のザックを背負った状態で、さらにかたい雪で急な斜面ではどうなるのかと不安に思う。ピッケルストップでは、鎖骨にブレードが当たってはなく、ピッケルが体から離れてしまうということが多々あった。それでも何とか直して最後のほうは先輩方からなんとか合格点をいただいた。しかし、ほかの雪上技術に比べて練習、実践する機会が少ないピッケルストップを、今回のように落ちようとして落ちるのではなく、予期しない状況で落ちたとして、とっさに合格点をもらった時のようにできるのかと不安が残る。もちろん、そんなことは絶対にないように、まず滑落しないように歩行技術を身につける、たとえ滑ったとしても初期停止で止まらなければならないが。今回雪上技術で学んだことは、できなければ命の危険に直結する。何が何でも身につけなければならない、体幹、姿勢を鍛え、資料等での歩き方の確認が必須である。

・槍ヶ岳アタックについて

6日目ということで、靴擦れがだいぶひどくなっていて、行動時間も今までよりだいぶ長く、登頂できるかどうか不安であった。結果として登頂できたのでよかったが、今までに言われていたことがすべて生かされていたわけではなかった。まず、周りを見るなど注意喚起については、3日目の雪渓歩きよりは改善したと思うが、長い登りで疲れた時など、おろそかになっていたと思う。疲れた時にこそ、周りに注意を向けるというのは、雪上訓練で言われていたことなので、まだまだ意識

が足りないと感じた。槍の岩場では、今回は上級生の方が足や手の置場を指示してくださったが、これは自分でできるようにしなければならない。また、岩場での浮石に対する危機意識が足らなかった。浮石かどうかあまり確認しないこともあり、何度か触れそうになった。上級生の方の指示のおかげで何とか触れずに済んだが、浮石かどうか自分で見極めなければならない。また、はしご場での三点支持もおろそかになってしまった。これは、意識すればすぐにでもできることなので、しっかりとやっていきたい。

・生活技術について

エッセンやテントの中でのことなど、初めのうちは、高校の時と全く違い、戸惑いも大きかった。それでも日がたつにつれてやり方が分かってきたが、エッセン中に暇な時間ができてしまうなど、大きな反省があった。エッセンをしている相手の様子を見て、コミュニケーションをとれていれば交代で行う、まだ行っていないことをやる等、防げたことである。天気図に関しては、見やすい天気図を書き、予報もきちんと行えるようにとにかく書いて練習、本や天気予報での勉強が必要であると実感した。

今回の新人合宿は、先輩方の話を聞く限り、条件が良かったのではないと思う。7日間ほぼずっと晴れていたし、また、雪の量も少なかったらしい。しかし、自分たちが指導する立場になっても、こうであるとは限らない。それでも、きちんと指導できる立場になれるように、未熟で足り

なかったと思うことは今後の山行で、どんどん消化していかなければならない。また、体力・体幹の強化や生活技術や装備に関する事など、下界でもできることは、下界で行い、山にできるだけ問題点を持ち込まずにしっかり身につけることが必要である。最後に、槍の頂上、最高でした。

村上友理

初日

島々から徳本峠まで移動。岩魚留小屋までは平坦な道だったが、37kgのガッシャーは背負うだけで辛かった。岩魚留小屋を過ぎると徳本峠まで急登が続き、荷物こそバラさなかったものの自分の筋力・持久力のなさを痛感した。初めてのエッセンは勝手がわからず先輩の指示に従っていただけなので合宿を通じてSACのエッセンや生活技術を身につけねばと思った。

2日目

徳本峠から横尾まで移動。初めての朝ラーも先輩に指示を受けながら作った。明神までの下りはところどころ雪が出ており、特に雪渓をトラバースする際は高校時代の雪訓を思い出しながら歩いた。明神から先の整備された道は登山靴では少々歩きづらかったがそれでも左手に見えた明神岳をみるとアルプスに来た、という実感が沸き、足取りも軽くなった。ベースを作り、3日目から始まる雪訓に備えて早めに寝た。

3日目

雪訓を行った。

本谷橋までは登山道が出ていたがそれ以降は雪渓上を上がっていった。登りは落石に注意しながらしっかりキックステップをするのが大変だった。徐々に穂高や涸沢岳が見えてくる景色は高校生の頃から憧れていた涸沢そのもので胸が踊った。雪訓では直登・直下降を行った。直登に関しては問題なかったが直下降はバランスをとりながら足を振り上げるのが難しかった。涸沢から横尾に戻るときは下りながら時々後ろを振り返ることが大変だったが慣れていきたい。

4日目

この日は同じテントの鶴見がレストということで朝の準備に焦りがなくなってしまい、他のテントより若干遅れてしまった。雪訓では斜登降・カニ歩き・ピッケルストップ・シリセード・グリセードを学んだ。前日のトレースが残っており足場を崩しがちだったが、トレースに負けないように強く蹴りこむことを意識した。ピッケルストップはいざという時の最終手段であるというのを意識して、しっかり止められるよう何回も練習した。

5日目

雪訓最終日。前日までの総復習をした後、ピッケルストップの練習をした。疲れがたまっていて、前日にできたことができない自分に苛立った。涸沢走りも会1男子最下位だったので、当面の課題は体力だと改めて

感じた。

6日目の槍ヶ岳アタックに備えて早めに寝た。

6日目

槍ヶ岳アタック。

ババ平までは雪も現れず沢沿いを歩いて行った。ババ平以降は雪渓を上がり、途中から1年もトップをやらせてもらった。自分は肩の小屋手前でトップをさせてもらい、先頭はやはりいいな、とつくづく感じた。

肩の小屋から槍の穂先までは岩稜ではあるものの、そこまで恐怖心は感じなかった。穂先から肩の小屋までの下りは鎖でFIXをしたが、やはりここもそこまで恐怖を感じなかった。

肩の小屋からババ平まではところどころシリセードを使いながら下りてこれたので楽だったが、シリセードを使えるのかよく見極めてから使うようにしたい。

夜のパーティーは楽しかった。

7日目

下山。

団装ツバリで空き缶を引いてしまったのは残念だったお墓参りの後はノンストップで上高地に行き、温泉に入ってソフトクリームを食べた。ソフトクリームは梓川左岸の店のほうがおいしかった。

ボックスに戻り、団装を片付けた。

総括

今回の合宿はまだまだSACの基本を学んだだけにすぎない。雪上歩行や生活技術は今後、週末山行に行く中で向上させて

いきたい。

藪内鷹

まず、1日目。徳本峠越えであるが、初めて30kg以上の荷物を背負った。当然、肩や腰が締め付けられて痛かった。それ以上にパッキングがへたくそだったためガッシャーのバランスも悪く悪路を歩いたりするとバランスを崩しそうになり怖い思いもした。パッキングの技術も向上させていきたい。そして、注意喚起が足元ばかり見ていてなかなかできていなかったところもあった。しかし、後半は声も出てきて非常によい雰囲気です徳本峠を越えることができた。テン場でのエッセンでは初めてのためだったため、手際も悪かった。2人分の余分を作るなど大きなミスもあり上級生に大変迷惑かけてしまう結果となった。

2日目はBCに向けて歩く。朝ラーや朝の準備が遅く、多くの人に迷惑をかけてしまった。焦ってしまいスパッツの右左を間違えたりなど多くのミスも見られた。歩き始めてからは、ところどころ雪や雪渓が残っており、なれないキックステップを使いながら一歩一歩進んだ。今思うと蹴り込みも本当にあまいと感じる。また、ピッケルの向き、持ち替えも意識はしているが時折忘れるミスも多かった。明神の出合からは快適に上高地を歩くことができ、楽しかったと感じている。しかし、上級生のアプローチのペースについていくのに必死であったため、歩きの技術を週末山行で磨いていきたい。エッセンでは1日目の失敗を生かしたものとなり、2人分余分が出たりなどのミス減らす

ことができた。

3～5日目は三日かけての雪上訓練。3日間を通して、涸沢までのアプローチでは落石の注意喚起を上級生に非常に指摘された。しかし、5日目には自発的に言えるようにもなり進歩したとを感じる。最も、日に日に広がるクレバスを見て怖いと思った。だから、本当に注意喚起は怠ることは絶対にできない。雪上訓練は初めてであり慣れないことでもあり最初は上手くいかなかった。しっかりとした蹴り込み、蹴り込む角度、姿勢…。全てがうまくかみ合うまでは時間はかかったが「基礎」は固めることはできたと感じる。しかし、まだまだ磨かなければならないし、今のままでは厳冬期に山に登ることはできない。だから、より確かなものにしていきたい。6日目は槍ヶ岳アタック。雪訓の集大成でもある。暗いうちに出発したため、ヘッテンを使いながらの歩きで歩きにくいと感じた。しかし、これからの週末山行などではあり得ることなので良い経験できたと感じる。槍沢の雪渓では自分が思っている以上に長く感じた。歩いている途中お互いを励ますなどSACのよい雰囲気で行くことができ、本当に良かったと思う。途中から1年だけが連なって歩くパートがあったが特に先頭で歩くときは楽しかった。しかし、それ以上にしっかりキックステップをしなければならなく蹴り込みがあまかったりなどまだ体力面においても鍛えなければならぬと感じた。しかし、先頭に歩く爽快感は最高だった。

槍の穂先まで行く行程のなかで岩がもろく落石もあるなか、一步一步、一手一手丁寧に置かなければならず、非常に苦労

した。また、とくに下りでは登り以上に怖いと感じた。槍沢ではシリセイドができて楽しかった。

最終日はただ上高地へ帰るだけだ。幸い、体調もそれほど悪くもなく、よいペースで河童橋まで歩くことができた。途中、山岳会のOBの墓参りをした。山岳会の歴史を感じるとことのできた一時だった。明神岳を眺めながら快適な歩きができた。河童橋についたときは大きな達成感でいっぱいだった。

最後に、この合宿で身に着けたこと忘れず個人的にもしっかりと確かめたい。また、体力面においてもまだまだ未熟であり、技術においては全く満身に達するものではない。週末山行、長期縦走などで力つけていきたい。

山口耕平

・準備について

一日目、初めに感じたのが準備不足である。最初に使うことになることが分かっていた波多の地図を地図入れにセットしていなかった。また、パッキングについても自分が何処に何を入れたか把握できておらず、二度手間になることがあった。これらのことは入山前に少し考えれば分かり、容易に改善できることである。それが出来なかった一因に、準備時の時間的、精神的余裕のなさが挙げられる。私が個装の準備を完了したのは団装準備日前日の夜遅くで、ただ団装準備に間に合うように個装を詰め込んだだけのパッキングになっていた。下界では使える時間がいくらでもあったのだから、ギリギリまで待たず早めに準備をしておくべきであった。

また、たとえ時間的余裕が無いときでも、間に合わせのいい加減な行動は後に更なるタイムロスを生む上、危険にも繋がるため、落ち着きを持って後々の事を考えて行動すべきだった。

・生活について

自分が今回の合宿で、一番改善の必要を痛感したのがこの生活である。とにかく行動が遅かった。二日目、三日目の朝は準備が遅れ、隊の全員を待たせてしまった。二日目の行動の遅さの一番大きな原因が、パッキングの遅さだと思う。パッキングの遅さの原因には、テント内の個装を散らかしていたことが挙げられる。個装を散らかすとパッキングが遅くなるだけでなく、物を失くすことにも繋がるため、今後個装はスタッフバッグ等にまとめ、どこに何を置いたか容易に把握できるよう工夫する。また前日の内にどの様にパッキングするかを構想しておき、それが実現しやすいように個装を分別しておくことも必要である。パッキングの遅さの原因として、他にも二度手間と周りが見えていないことが挙げられる。私は団装を受け取った後、一度個装のパッキングの一部をバラして団装を詰め、パッキングをやり直した。周りを気にしていれば、個装を一度除けて詰めなおす様な暇も必要もないことはすぐに分かっただろう。自分のことに必死になりすぎず、周囲の状況を常に気にする姿勢を身につけねばならない。また、個装を詰める時に団装も後で詰めることを考慮し、ガッシャーの紐は締めないでおくといった、後のことを考えた行動が時間短縮のために必要である。急いでいる時ほど、次に何が起こるか

を想像して行動を選択するようにする。三日目の朝の準備の遅れの大きな原因としては、排泄があったと思う。時間は自分で作るものである。排泄に時間がかかることは分かっていたので、例えば朝ラーが湧いている間に鍋持ちを他の人に任せ、排泄を済ませるなど積極的に時間を作るべきであった。自分が排泄に行く旨が周りの人にうまく伝わっていなかったことも反省である。自分が排泄に行っていることを上級生に伝えて欲しいということをしちんと説明するべきであった。

朝ラーについての反省を述べる。一番大きな反省点は、配膳の際お湯に手を突っ込んで火傷をしてしまったことだ。配膳を急ぐあまり熱に対する意識が希薄になっていた様に思う。自分は急いでいる時、焦って行動がかなり雑になっている。急ごうとも落ち着いて行動できるようにする。また、火傷した後、遅れたくないあまり火傷の処置を怠ってしまった。怪我が悪化して下山するような事になっては元も子もないので、今後怪我の処置はしっかりする。また、怪我をしたらすぐに上級生に見せ、指示を仰ぐようにする。

自分にとって山での生活は不慣れであり、リラックスすることは出来なかった。生活で疲労を蓄積させているのは長い山行ではとてももたないと思うので、早く生活に慣れ、楽しむぐらいの余裕を持ちたい。

・歩行について

歩行では体力、気力、技術共に不足を感じた。特に大きな段差を降りる時の重心移動が下手である。なるべく膝に負担をかけない滑らかな重心移動が出来るよう、一步一步練習するつもりでこれからの山

行に臨んでいきたい。また、足置きが雑であった。自分は急いでいる時、雑になる傾向が強いので、急いでいる時は意識的に冷静になるようにする。体力の不足は日々鍛え改善せねばならない。槍アタックの際、隊のペースに遅れてしまった。これは体力の不足による所が大きいですが、気力によってもう少しなんとかできたのではないかと思う。遅れないという気概が足りていなかった。パーティのペースを自分に合わせてもらうようではただの足手纏いなので、自分がSACのペースに合わせてられるようにする。

・雪上訓練について

どの歩方でも蹴り込みが甘かった。筋力不足と足が上がりきっていないことが原因にある。足を高く上げて振り子の力を利用した方が疲れず効率的に力が加えられることに留意し、可能な限り足を高く上げることを意識する。また、自分は強く蹴り込もうとする時前傾してしまう癖がある。命に関わる癖であるため、絶対に直す。訓練中、疲れてしまうことがあった。冬山での実践に向けて体力をつけるのはもちろん、効率的で疲れにくい歩方を身につけねばならない。また、疲れた時はただでさえ危険であるので、疲れた時ほど強く蹴り込むことを意識する。

・感想

今回の新人合宿は、自分にとってとにかく濃いものであった。寝る時間以外何らかの活動をしているなどという経験は自分には初めてで、テン場についてからもあまり気が休まらなかった。新人合宿で学んだ基礎が当たり前出来るようになって初めて山を楽しめるようになると思う

ので、可能な限り早く自分のものにした。山行中、自分がパーティに貢献できたと思うことが全く無かった。何らかの役割を持てるようになってこそパーティの一員だと思うので、真の意味でパーティに加わるよう努力する。その他に印象に残ったことが、人間関係の濃さである。先輩方のご指導は本当に真剣なものであったし、自分も真剣にやった。このような濃い付き合いは自分にとって初めてであり、とても得難いものであると感じた。この濃い、真剣な人間関係を大切にしていきたいと思う。

《夏合宿》

○行動記録

8月22日(0日目) 前泊

13:30 Box 集合～15:20 大町のセブンイレブン着～15:50 扇沢駅着～16:30 扇沢駅発～16:45 黒部ダム駅着～16:55 黒部ダム駅発～17:25 T.S 着

8月23日(1日目) 入山

3:00 起床

・先発隊:塩谷 内田 渡部 植野 河村 曜子 村上 藪内 山口 小山

4:50 T.S 発～6:05 内蔵助谷出合～10:50 内蔵助平着～12:00 内蔵助平発～14:40 ハシゴ谷乗越～17:50 真砂沢ロッジ着

・後発隊:荒川 加藤(穂) 長谷川 松橋 大槻 前田 稲垣 会原 小笠原
山下 蒲澤(山下・蒲澤は当日入山だったため、遅れて合流)

5:10 T.S 発～6:50 内蔵助谷出合～11:50 内蔵助平着～12:25 内蔵助平発～14:50 ハシゴ谷乗越着～15:30 ハシゴ谷乗越発～

18:10 真砂沢ロッジ着

8月24日(2日目)

4:00 起床～5:00 B.C 発～5:45 長次 8 郎谷
出合～

○登攀 ～7:45 岩小屋着～各隊登攀～

14:40 岩小屋着発～16:35 B.C 帰着

・ルート：A フェース（魚津高ルート→中
大ルート） 内田 大槻 稲垣

8:20 魚津高ルート取り付き～

10:20 トップアウト～11:05 下降開始～

12:20 中大ルート取り付き～13:55 岩小屋
着

・ルート：A フェース（中大ルート→魚津
高ルート） 加藤（穂） 植野 小山

8:30 魚津高ルート取り付き～

10:50 トップアウト～11:15 下降開始～

12:20 中大ルート取り付き～13:20 岩小屋
着

・ルート：C フェース（劔稜会ルート）

塩谷 城田 村上

7:55 取り付き～11:00 トップ

アウト～11:25 下降開始～12:58 岩小屋着

・ルート：C フェース（劔稜会ルート）

山下 渡部 山口

8:48 取り付き～11:40 トップ

アウト～14:30 岩小屋着

・ルート：D フェース（富山大ルート）

荒川 長谷川 小笠原

8:30 取り付き～12:40 トップ

アウト（以下、山下隊に同じ）

○バリエーション

・ルート：劔岳・源次郎尾根 蒲澤 河村
松橋 会原 前田 藪内

6:20 源次郎尾根取り付き～

11:00 II 峰～11:30 II 峰—劔岳本峰間の

コル～12:30 劔岳山頂～13:30 平蔵谷のコ
ル～16:00 B.C 帰着

8月25日(3日目)

3:30 起床～4:35 B.C 発～5:15 長次郎谷出
合～

○登攀 ～7:00 岩小屋着～各隊登攀～

11:20 岩小屋発～12:40 B.C 帰着

・ルート：A フェース（中大ルート） 蒲
澤 村上 山口

7:30 取り付き～9:15 トップア

ウト～9:50 下降開始～11:10 岩小屋着

・ルート：A フェース（魚津高ルート）

大槻 長谷川 藪内

7:31 取り付き～10:10 トップ

アウト～11:05 岩小屋着

・ルート：C フェース（劔稜会ルート）

加藤（穂） 河村 前田

7:55 取り付き～10:55 トップ

アウト～11:30 下降開始

・ルート：C フェース（RCC ルート） 荒
川 松橋 会原

7:40 取り付き～9:45 トップア

ウト（以下、加藤（穂）隊に同じ）

○歩き

・ルート：別山南峰 塩谷 内田 山下
渡部 植野 小山 小笠原 稲垣

～7:15 劔沢キャンプ場～8:15

別山～10:10 B.C 帰着

8月26日(4日目)

3:30 起床～4:35 B.C 発～5:10 長次郎谷出
合～

○登攀 ～6:52 岩小屋着～各隊登攀～

11:40 岩小屋発～13:10 B.C 帰着

・ルート：A フェース（中大ルート） 長

谷川 山下 会原

7:40 取り付き～10:05 トップ
アウト～11:10 岩小屋着

・ルート：A フェース（魚津高ルート）

荒川 前田 小笠原

7:34 取り付き～9:30 トップ
アウト～10:30 岩小屋着

・ルート：C フェース（劔稜会ルート）

内田 河村 山口

7:45 取り付き～10:05 3P 目終
了～10:10 降雨により下降開始～11:20 岩
小屋着

・ルート：C フェース（RCC ルート） 松
橋 植野

8:00 取り付き～9:45 降雨によ
り下降開始～11:20 岩小屋着

・ルート：C フェース（RCC ルート） 蒲
澤 藪内 村上

8:40 取り付き～その後劔稜会
ルートへ移動～10:00 降雨により下降開
始～11:15 岩小屋着

・ルート：本峰南壁（A2 ルート） 加藤
（穂） 渡部 稲垣

～5:30 平蔵谷出合～8:05 取り
付き～8:50 降雨により下降開始～9:40 下
降終了～11:50 B.C 帰着

○バリエーション

・ルート：八ツ峰主稜上半部 塩谷 大槻
小山

7:30 5,6 のコル～8:30 D フェ
ースの頭～11:00 八ツ峰の頭～13:50 長次
郎谷出合～14:05 B.C 帰着

8月27日(5日目)

3:30 起床～6:45 行動決定～7:06 B.C 発～
7:40 長次郎谷出合～

○登攀 ～9:15 岩小屋着～各隊登攀～
16:00 頃岩小屋全員発～B.C 17:00 頃全員
帰着

・ルート：A フェース（魚津高ルート）

松橋 植野 会原

11:15 取り付き～14:55 トップ
アウト～15:45 岩小屋着

・ルート：C フェース（劔稜会ルート）

渡部 大槻 小笠原

10:15 取り付き～14:40 トップ
アウト～16:00 岩小屋着

・ルート：C フェース（RCC ルート） 荒
川 前田 稲垣

10:00 取り付き～13:00 トップ
アウト～14:00 岩小屋

・本峰南壁（A2 ルート） 塩谷 河村 会
原

～8:00 平蔵谷出合～10:30 取
り付き～13:30 劔岳山頂～16:08 B.C 帰着
○バリエーション

・ルート：八ツ峰上半部 蒲澤 長谷川
村上

～9:15 岩小屋着～10:20 D フェ
ースの頭～12:00 八ツ峰の頭～14:25 池
ノ谷乗越～15:40 長次郎谷出合～16:08
B.C 帰着

・ルート：長次郎谷右俣

～10:05 熊の岩にあがる～
11:30 本峰手前のコル～11:50 劔岳山頂～
14:40 B.C 帰着

8月28日(6日目)

3:30 起床

○登攀 ～4:32 B.C 発～5:05 長次郎谷
出合～6:30 岩小屋着～各隊登攀～14:10
岩小屋発～15:20 B.C 帰着

・ルート：A フェース（中大ルート→魚津高ルート） 塩谷 松橋 稲垣

7:00 中大ルート取り付き～
8:50 トップアウト～10:00 魚津高ルート
取り付き～12:30 トップアウト

・ルート：A フェース・C フェース（魚津高ルート→劔稜会ルート） 山下 河村 前田

7:02 魚津高ルート取り付き
～10:20 トップアウト～11:41 岩小屋着～
12:05 劔稜会ルート取り付き～13:10 時間の
関係により下降開始～13:30 下降終了

・ルート：C フェース（劔稜会ルート）
大槻 長谷川

7:15 取り付き～11:15 トップ
アウト～13:10 岩小屋着

・ルート：C フェース（RCC ルート） 植
野 荒川 小笠原

7:15 取り付き～11:40 トップ
アウト～12:10 VI峰の頭～14:00 岩小屋
着

・ルート：D フェース（富山大ルート）
蒲澤 藪内 小山

7:15 取り付き～10:10 トップ
アウト～14:00 岩小屋着

○バリエーション

・ルート：劔岳・北方稜線 加藤（穂） 渡
部 村上 山口

4:30 B.C 発～5:30 三ノ窓出合
～8:30 三ノ窓のコル～11:15 劔岳山頂～
14:00 B.C 帰着

8月29日(7日目) 下山日

3:30 起床～6:00 室堂行決定～6:30 発～
7:30 平蔵谷出合～8:40 劔沢小屋～9:30 劔
御前小屋

～11:30 室堂着

○個人・係の反省

CL 荒川武大

攻めきれない合宿になったと思う。今年
の3年にはぜひ来年も夏合宿に参加して
ほしい。夏合宿は自分たちの工夫次第
でいくらでも楽しくなる。以下今後使え
そうなルートを挙げる。

・丸山東壁 ・マイナーピーク東面スラブ
～八ッ峰下半～上半 ・チンネ

・本峰北壁 ・劔尾根 ・B フェース ・
源次郎登攀 ・クレオパトラニードル
劔を縦横無尽に遊びつくしてほしい。毎
年課題になるのは2年生のリード問題だ。
歩きの山行を入れつつ、1度はアルパイ
ンに言っていることが望ましい。

SL 塩谷晃司

夏合宿において、沈殿なしで行動でき
たことは類まれなことで、それぞれがよ
い経験を積むことができたのは、非常に
幸運だった。だからこそ、登攀2日目に
天気予報に惑わされ、源次郎尾根・D フェ
ース隊を解体し、別山に逃げたことが悔
やまれる。そもそも天気とは、不確定要素
以外の何者でもないのだから、もっと柔
軟に対応できるように、様々なパターン
を想定しておくべきであった。登攀の可
能性がある限り、ベストを尽くす。アプロ
ーチで雨に降られて敗退したとしても、
それはそれでいいと思う。ただ、それは悪
天でも突っ込めばいいということではな
く、自分のなかでリスクを正確に把握し、
制御可能な状況の中で行動することが重
要だろう。今回、私が踏み込めなかった理

由は、はっきり言って自信がなかったからだ。初見のルートで、敗退が困難ということに不安を感じた。不安を感じても行くべきだったかと考えてみるが、そうではないと思う。この夏合宿までに、自信を持てるだけの十分な経験が足りていなかった。そこを反省すべきだ。自分のウィークポイントをしっかり見つめなおし、強化していきたい。

八ツ峰上半縦走の際は、天候は良くなかったが行程を進めた。この判断に関して、私は問題なかったと思う。その理由は、自分自身の制御可能な領域で行動していたと思うからだ。確かに初見のルートだったが、ルーファイや天気の変化に対応できる自信はあった。この点に関しては、昨年より成長がみられた。

自分が下級生をリードして山に登る場合、天候などの不安要素が増えたときに、行けない理由を下級生に求めがちである。しかし、本当の理由は自分自身の実力不足だ。

昨年の反省にも同じことを書いたが、今回もそのことを強く感じた。自分より実力が下の者を連れていくのは、責任も重いし、非常に怖いことだ。しかし、下級生の実力不足をカバーするだけの能力を上級生は身に付けていかなければいけないと思う。

一年生はこれからだとして、二年生のガレ場や悪い場所を歩く能力が欠落しているように感じた。確実な歩行技術がすべての要になると思うので、様々な状況に対応できる歩行技術を習得してほしい。

全体的なこととしては、かなり円滑に進んでいたように思う。その理由は多々

あると思うが、それぞれが役割を果たし、コミュニケーションをよくとっていたからだと思う。無線の調子がよかったことは幸이었다。

VI峰フェースと源次郎のルーティンではなく、本峰南壁や一年を連れて上半や北方稜線に行けてよかったと思う。来年の夏合宿は更に剣を遊びつくせるように、それぞれがよい経験をつんでいきましょう。

会3

内田祥平

今年の夏合宿を一言で表すと不完全燃焼、この一言に尽きると思う。上級生の義務としては下級生を安全に登らせ、下山させる。まずこれが第一優先事項であると思う。自分はサマテンでのバリエーション、アルパイン経験、また墜落前日のAフェースリードで変に自信をつけてしまった。ここで優先事項を頭から消しCフェースの登攀に臨んだ結果、出だしで落ちケガをした。(ケガはたいしたことがなかったのが不幸中の幸いであったが) アドレナリンでその時はCフェースをリードし、天候での敗退となったのだが、これは上級生として愚行であった。あらゆる可能性を考え、冷静に判断することが求められる立場でのこの行動は反省。入山、Aフェース、別山(一般路)しか登れなかったため完全燃焼。これからはこの反省を活かすことが求められる。それは自分だけでなく他人に対してもだ。実力の把握はもちろん(会内で共有する)、気持ち的なものも重要。山は自然相手であり常に真摯に向き合わなければならない。

また、夏合宿全体の感想としては成功だと思う。天候は全日程登攀出来て、1年生も登攀、バリエーションに出来るかぎり行けた。1年生は毎日慣れないアイゼンで雪渓を登るのはきつかったと思うが、よくやったと思うし夏縦走での体力向上の成果出ていたと思う。2年生、3年生においてもリードを連日こなすことができかなり実力も自信もついたと思う。だからこそ悔しかった今年の夏合宿。この悔しさを冬、来年の夏にぶつけたいと思う。

加藤穂高

結果的に登攀を予定していた5日間すべて行動することができた。私は登攀3日間と歩き2日間の内容だった。

登攀では夏合宿初のリードで八ツ峰を攀じった。スピード不足とフォローへの気遣いのなさを感じた。1ピッチに1時間も要した場面もあった。普段の長野市物見での岩トレでいかにスピードを意識せずのほほんとやっちゃっているか思い知らされた。スピードを上げるためにやることは支点を減らすとかそんな話ではなく、やはりどれだけ場数を踏むかの一点だ。まだ体に覚え込ませたと言えるレベルには程遠い。せつかく長野市物見岩のそばに住んでいる身として通い詰めることと、いかに毎回の岩トレをバリエーションのあるものにできるか、毎回同じことの繰り返しにしないかが重要だと思う。スピードと共に後期から意識していきたい。また私の後から登る1年生に登りに集中できる環境を作ってやりたかったのだが気遣いが足りていなかった。要らぬ荷物を背負わせてしまったり、余

計なキंकを作ってしまった。リードの私たちも緊張するが初めて刃を攀じる1年の緊張はそれ以上だ。新人合宿同様、1年はまだ何もできないことを前提に快適に登ってもらえる環境を用意する責任が私にはある。SAC長野組も今年から3人になった。これも普段の岩トレでフォローを引き連れ支点のとり方、呼ぶ順番、ビレイのさせ方、細かい工夫はいくらでも見つけていきたい。

歩きでは長次郎谷右俣、三ノ窓経由の北方稜線のルートで本峰を踏んだ。長次郎谷の際薄くなっているだろう雪渓末端やクレバスに近づきすぎて八ツ峰にいた本隊より無線で注意を受けてしまった。結局雪渓末端近くまで詰めたのに戻る羽目になり1年生を無駄に歩かせ危険にさらしたことを反省する。雪渓に関してはいつ崩れるか、どこまで乗っていられるかなど誰にも分からない。自分の根拠のない判断を見直し、慎重すぎるほどの判断をとっていきたい。長次郎谷より主稜線にあがったあとにルーファイに時間をかけすぎたことも反省だ。無駄な時間である以上に、上級生がこっちかあっちかやっついては1年を不安にさせてしまう。長次郎谷右俣については、単純に下調べ不足を反省する。

今回の合宿、登攀では2年の半数以上がリードを経験した。リードするほどに成長した2年を見て、親戚のおばさんが久しぶりに会った甥っ子の発育っぷりに驚くような感覚だ。しかしこの感覚はまずい。普段いかに2年はじめ他キャンパスの奴らの実力を把握していないか思い知らされた。これから会を動かす身とし

では、ひとりひとりに興味をもって知ろうとする必要がある。また去年実力的にリードができなかった私は、成長する2年に負けてられないなという思いだ。会に所属する者のノルマとして八ツ峰は何処でも1年生を連れていけるレベルになる責任がある。雪が降るまでに岩に触れる機会を増やしていきたい。

今年は5日間の行動と充実していたが、剣はまだまだ遊べる。来年こそ今回行けなかった南壁やチンネを倒せるよう実力をつけて戻ってきたい。

蒲沢翔

まず夏合宿の良かった点は、①早めに1年の荷物を分けて、予定通り点場に到着することができた。②登攀・バリエーションのパーティのリーダーとして、多くのルートに行くことができた。①について、去年は1年に無理をさせ過ぎて、点場への到着が大幅におそくなってしまった。その反省を生かして1年の状態を早めに判断して、指示を出すことができたのはよかった。結果として隊の安全にも繋がったと思う。②について、去年と違いパーティ内のリーダーとして5つもルートに行くことができた。これは来年に向けてのいい経験になった。

次に反省点について、①パーティ内のリーダーとして十分に安全面に気を配れなかった。

②ルートファインディング・支点構築の未熟さ。が挙げられる。①について、もちろん行動中は危険箇所の通過には気を付けていたつもりだが、下級生を連れていくことを考えるともっと慎重にならなけ

ればならない部分があったように思う。剣岳周辺では今年も多く事故が起きており、経験の浅い1年生を連れていくために安全面での配慮を怠らないようにしたい。②について、去年よりは格段に上達したと思うが、まだまだルーファイ・支点到に時間が掛っている。早く登ることは安全に繋がるので、さらに技術を磨きたい。

会2

植野侃太郎

今年、会2として臨んだ夏合宿は非常に有意義なものになった。

雨ばかりで二日しか登攀出来なかった昨年と違い、全日行動できたためにアルパインでのリードの経験を積むことが出来た。しかし、反省もあった。

まず、雪渓の通過において、間隔をあけるかどうかやルート取りの判断がまだまだ未熟であった。危険箇所では間隔を空けずに、比較的安全なところで間隔をあけるのは矛盾している。端により過ぎなのに気付かず、中央を横切るときは間隔をあけるのでは意味がない。自分で注意するだけでなく、間違いに気づいたら指摘するべきだろう。

また、歩きも未熟であった。ザレ場で滑り、ガレ場で落石を落としているようではなんら一年と変わらない。直に冬も始まるので、意識を切り替えねばならない。

次に、今回はAフェース魚津高、CフェースRCCを全ピッチリードすることが出来た。どちらもトップアウトまで4時間以上かかってしまったのは反省だが、ヒヤリとする出来事も無く、無事に登攀

を完遂できたのは非常に良かった。ナチプロの設置、ザイルの流れ等、いままで立岩で積んだ経験が活きたと思う。今後の活動にむけて、手応えを感じた。来年にはさらに登れるよう精進していきたい。

大槻泰彦

今回の夏合宿は真砂沢ロッジに定着した5日間すべてにおいて行動できるという幸運に恵まれた。その分収穫・反省ともに多くのことを得られたと思う。以下具体的に述べる。登攀ではAフェース魚津高ルートとCフェース剣稜会ルートをリードする機会を得た。どちらも行ったことのあるルートだったが、リードで登るのにはかなりの時間を要してしまった。その原因は、登る能力というよりもプロテクションやアンカーの設置に時間がかかっていることである。ルートの中には乗越すのに思い切りの必要などころもあったが、それはごく一部である。一つ一つのプロテクションをどうやって取ろうか?ということを考えている時間が長すぎるのである。登りながら視野を広げ「あそこに取れそうだ」と考えたり、余裕そうなところは思い切ってプロテクションを取らずに伸ばしてみたりといった判断にかかる時間・迷っている時間を短縮できるように、今後の岩トレに取り組んでいきたい。バリエーションで行った八ツ峰上半部では、単純に先頭を歩いていた塩谷さんのペースについていくのがきつかった。特に浮石地帯など悪場での歩きでは大きな差をつけられた。落石を落とさない慎重さと、危険地帯を素早く安全に抜けるためのスピードを両立できるよう

にしたい。そのためにはもっと悪い道を歩く経験を積極的に積んでいく必要がある。また、ザイルワークに関しても、ここではどう畳むのが効率が良いか?など考えが不足している場面があった。これはザイルを使うような山行経験が少ないことが最も大きな理由であると思うが、普段の岩トレなどでも想定のしかた次第で練習することは出来る。もっと積極的にザイルを扱う機会を増やしていきたい。登攀以外の要素では、長次郎谷を詰めているとき、1年生の様子を見て大丈夫だろうと思い込み雪渓を直登し、登攀前の1年生を疲れさせてしまったことがある。新人合宿の反省で1年生の様子にもっと敏感になると書いたにもかかわらず、それが活かせていなかった。自分で判断しにくいときは後ろの上級生と言葉を交わすなどコミュニケーションを取れば確認できることでもある。会2全体にも言われていたと思うが、同期間、上級生同士、上級生と1年生の間のコミュニケーション・意志疎通を円滑に行えるようにしていきたい。

医療系の反省

医療缶の数について、ベースに置いておくものはテントの数だけ、登攀などに持っていくものはその隊の数だけ用意するというアイデアは良かったのだが、登攀に持って行ったものがベースに戻ってきて団装テンに入れられたり、各テントに入れられたりと扱いがバラバラで、ちゃんと数がそろっているかのチェックなどがスムーズでなかった。これは医療係である自分の指示不足であった。また、医療

係として全員の健康状態をしっかり把握し、上級生同士で共有することにおいて中心になるべきだったが、他の上級生が積極的であったため自分は影が薄かったと思う。係としての自覚が行動に現れていなかったことが反省である。

河村将人

今年の夏合宿は去年とは違いエッセン係という役割があり、また行動の面でも上級生としての責任感があり全く違ったものとなった。エッセン係では事前の準備の段階では特に問題がなかったもののペミカンがボックスの冷凍庫に入りきらなかったため1年生に出発の日に待たせてもらうという形をとったが各自ペミカンを入っていない食料袋が出来てしまうという事態になりテン場で探すということになった。結果としてほかの食料袋に入っていたため肉が食べられないという事態は避けられたが自分の確認不足であった。またテン場に帰るのが全体的に遅めであったため自分が帰る前にほかの上級生にエッセンの指示をしてしまうということが多かった。その際前日に指示などをあらかじめ出しておけばスムーズに進んだと思う。

行動では雪溪の処理などで先頭を歩いてみて経験不足を感じた。またがれ場の下りでもまだまだ歩きが安定していなかったともう。今年は1ピッチだけであったがリードもすることができた。本チャンの岩場でリードすることでシステムの構築の時間などまだまだ時間がかかってしまった。経験が大事であるとあらため

ておもった。

城田曜子

昨年の夏合宿は歩荷に終わってしまったため、私にとって本チャンでの登攀は今回が初めてであった。アルパインクライミングならではの恐怖感を味わい、自分の登攀技術の低さを目の当たりにした。今回はフォローで登ったが、正直言ってリードする自信はまだないというのが現状である。これを払拭するにはやはり普段の岩トレ、そして三ツ峠などのゲレンデでの経験が必要であると改めて感じた。登攀中の一番の反省点は、懸垂下降での時間のかけすぎである。私は一番手で下降したが、途中でザイルが絡まり、それを解くのに時間を浪費してしまった。スムーズな仮固定やザイルワークができていればこのようなことにはならなかつたろう。また岩に移るタイミングを逃し、落石の多いルンゼへと降りてしまった。これは先を見越した下降のルート取りができていなかったことが原因である。ルート取りという点で反省すべきことがもう一つある。それは雪溪でのルートファインディング能力の乏しさである。端や真中の薄さに対する意識が甘く、必要以上に雪溪をトラバースすることになってしまった。一年生に上級生としての見本を示すどころか、悪い例となってしまった。

今回の夏合宿も実習のために4日間しか参加することができなかった。私は昨年の経験もゼロに等しく、上級生としての自覚が足りていなかったように思う。より経験を積んで、自信と技術を身に着け

ていく必要があると実感した。

長谷川士門

夏合宿の1日目、黒部ダムから真砂沢ロッジまでの歩荷であるが、この日は改めて1年生の体力と行動時間やケガのリスクなどとの兼ね合いについて考えることができた。夏合宿の歩荷は縦走より遥かにシビアだ。途中で区切ることもできないが、暗くなる前にはテン場に着きたい。しかし、1年生には頑張らせたい。結果的にザックをバラす判断は会3以上の意見をあおぐ形となった。バラすバラさないにはっきりした基準はなく、自分で見立てたコースタイムや本人たちの歩きなどを見た判断が必要になってくる。結局、先輩達の提案でバラして、ロッジに着いたのは暗くなりかけていたころ。私は提案されるまでもう少し頑張らせるつもりであったので、下手をすればもっと遅くなっていただろう。まだまだ周りの人間の疲労具合などを考慮したコースタイムの見立てが甘いようだ。常に考えて山に入るようにしたい。2日目以降は登攀日。今年は全日登攀ができて非常に恵まれた。特に去年苦い思いをしたDフェース富山大ルートだが、フォローではなんとかなったものの、リードすることを考えるとまだ難しいと思う。ルートのとり方やピッチの切り方などもほかのルートに比べてわかりづらい印象だ。来年への一つの目標にしたい。リードは魚津高ルートを一本しかできなかったが、良い経験だった。ザイルの流れやピッチの切り方など、前日フォローで登った記憶に縛られ過ぎて柔軟性に欠けていたと思う。普段の岩

トレなどでもオンサイトはあまりしたことなく、このままではクライミング幅が狭まってしまおう。人のあとをなぞるのではなく自分の考えをしっかりとって登りたい。単純にその方が気持ち良いし、上達につながるだろう。また、池ノ谷乗越までだが八ツ峰上半縦走も行けたのは嬉しかった。久々のバリエーションだったが、以前より積極的に考え、動けたと思う。ただ単純な落石への意識やガレ場の歩行など課題ももちろんたくさんある。なにより経験が大事だと思うので、個人山行でどんどんバリエーションに行きたい。

全体を通して思ったのが自分はまだまだ未熟であるということだ。歩行や登攀技術など、もっと上級生として圧倒的な強さを1年生に見せたかった。昨年感じた上級生への憧れや尊敬の念を、今年の1年生に抱かせてやることが自分は未だにできていないと常々感じる。何をすれば良いのか、どう指導してくべきか、常により良いものを追求していかななくては。受け継いだものをしっかりと下に伝えていけるよう努めていきたい。

記録係の反省

記録係としての大きな反省は事前の意識だ。登攀隊のメモ書きなどをしっかりと管理してちゃんとした紙面で用意すべきだった。その点に関して責任感がたりなく、他の上級生にやってもらってしまった。また、登攀隊にはトップアウトまでの時間を主に聞いたが、トップアウトから岩小屋にもどるまで、そして岩小屋からB.C までのコースタイムをきっちり聞い

た方がよい。少々わかりづらかった。

松橋華世

この夏合宿は私にとってとても実りのあるものになった。去年怪我で夏合宿に参加できなかったためいまちぼんやりとしたイメージしか持てなかったアルパインクライミングに触れられたからだ。今回浮き彫りになった今後の課題はガレ場や脆い岩のあつかいだ。今までの山行の中で足場が悪いところを歩くという経験が圧倒的に少ないということが分かった。これは経験を重ねるしかないので積極的にバリエーションルートについて練習しなければいけないと思った。脆い岩の扱いについては動く石でも足の置き方次第では動かさずにおけるということがわかったのでどんな脆いところでも歩けるようになるために動いても乗れる岩を見極めて足を置けるようになりたいと思った。合宿としての反省点は先頭に立ってパーティーをひばったり、一年生全体に指示を出したりできなかったことだ。

装備（ガチャ）系の反省

今回の合宿の装備としての目標は必要なガチャを過不足なく持っていくことと、それをなくさずに持って帰っていくことであった。まず持って行った装備の過不足についてだが、結果的に足りなかった装備はなく使わなかった装備としては、アブミと FIX 用ロープであった。しかし、どちらとも状況によっては使うことが想定されたので、過不足はなかったといえるだろう。次に、無くさずに持って帰ってくるという点についてだが、これに関し

てはメンバーが多い分、個々人が意識しなければどうにもならないことなので、装備系の役目としては「無くしたらばれるよ。だから、しっかりと管理してね」といった具合に管理に対して意識を向けさせることだと思う。この意識付けがうまくいったのか全くどこに行ったか分からず紛失した装備はなかった。多くの装備を扱うため数を把握することは大変だが、一つ一つにナンバリングし数を把握することは管理するにおいて有効だと思った。

山下耕平

夏合宿の一番の反省は、出発時に自分のピッケルを BOX 前に忘れてしまったことである。いくら一年生に荷物を運んでもらったからといって、自分の荷物の管理は自分ですべきであるので、その確認を怠ったのは私の責任である。結果、蒲澤さんとともに入山を 1 日遅らせることとなってしまい、会全体に迷惑をかけることとなってしまった。今後はこのようなことがないように気を付ける。

夏合宿メインである登攀・バリエーションでは、初めて上級生で参加する立場となり、かなり緊張した。1 日目、C フェース剣稜会ルートの 1 ピッチをリードしたとき、緊張のあまり、持っていた個装のハーケン 3 枚をすべて落としてしまった。1 ピッチ目であったので、フォローに回収してもらったが、回収不可能な場所に落としてしまった場合や、フォローに当たった場合のことなども考え、これからはこのようなミスが無いように気を付けたい。その他の日の登攀では、目立った個人的なミスは無かったと思う。昨年度は

ほとんどできなかった剣岳八ツ峰での登攀を、思う存分楽しむことができた。1年生の様子を見ていても、日ごろの岩トレの成果がよくできていたと思う。ほとんど口出しするようなことはなかった。バリエーションルートでは、自分はあまり経験がないと弱気でいたために、全面的に穂高さんに頼ってしまった。上級生としては、しっかりと自己判断できるよう、経験と判断力を身に着けたい。

会計係の反省

今年度は、室堂方面に下山することとなったが、そうするととてもお金がかかる。今年度は徴収金全額を合宿に持参していたため、何事もなかった。来年度以降も、室堂下山のことも考え、必要最低限のお金は全額持っていくべきである。

渡部優

[個人]

夏合宿は、新人合宿の次に会の全員が集まる機会である。

会2の立ち回りとしては、係や基本的な指示出しによって組織の運営に関わることも大事なことであるが、何よりも大切な

- ・1年生を育てる

という観点が私からは抜けていた。週末山行はもちろんのこと、次回以降の合宿において組織運営とともに、1年生への団体の中で動くことへの意識づけ、行動中の注意喚起、一方で個人への対応、性格、コンディション把握をしっかりと行うとともに、見本となれるように気と身を引き締めていきたい。

[気象係]

予報に関して、午前から午後から、回復傾向なのか悪化傾向なのかといった行動判断に生かせる細かい予報ができなかった。晴れを祈る係ではなく、行動に生かせる、ストップをかけるという意識がたりなかった。

会1

稲垣翔

行動（歩行技術等）

単純な歩きだけの日は入山の1日目、別山の3日目、下山の7日目。初日の歩荷では40キロ超を背負っての初めての歩きだった。午前中いっぱい粘ったが午後の行動では長い一本の後でも、完全に重さに負けてしまい最終的には転倒してしまった。今後歩荷力を鍛えていく必要性を感じた。下界でできるトレーニングと山の上でしかできない足置きの技術向上につとめたい。今回は初日の歩荷に加えて2日目にはアイゼンでの歩行も経験した。アイゼンの使用は初めてで装着にも手間取ってしまった。日を追うごとに慣れてきた部分はあったがより多くの経験をつんでいきたい。加えて、冬山が本格的にはじまるまでに今回学んだことをしっかりと復習しておこうと思う。

クライミング

Aフェイスを2回、本峰南壁とCフェイスを各1回ずつ登攀した。普段の岩トレでは味わえない高度感とザイルをいっばいまで出すという経験は貴重だった。システムや様々な技術についての知識は現

段階で必要とされることはあるていど身についていたと感じた。ただ、クライミングの様々な知識(リード、ギアの使い方、ムーブ、岩の性質 etc.) はまだまだで学ぶことがまだまだあるということを認識する機会になった。

生活

新人合宿以来の合宿スタイルでのエッセンを行った。五月に比べて一年生全体の経験値も上がり、次に何を行うのかが頭に入っていたことは大きなちがいがあった。隊ごとにBCへ戻ってくる時間が異なる今回のような場合にエッセン係が不在となり、三年生が率先して指示をだしてくださることも度々あった。これについては反省会でも取り上げられ今後改善されると思われる。雨の中での行動やテント内での生活では大きな問題点はなかったように思われる。ただ、これからの季節はとくに冷えるのでTSでの移動でも濡れへの意識を高めたい。

今後の課題

下界でできるトレーニングや気象・クライミング・山の勉強(簡単な天気予報ができる等)をもっとしっかりすること。冬山に向けて体作りもしていきたい。

小笠原一樹

私はこの夏合宿への参加を夏縦走でしたひざの捻挫のせいで迷っていた。先輩方に余計な負担をかけることになってしまったが合宿を終え、参加してよかったと思える。40kgを超える歩荷には体が持たず団装をくずしてしまった。冬の

歩荷を考えるとまだまだ実力不足だと感じた。10月に合戦尾根か地蔵尾根あたりでの歩荷トレや下界での筋トレに励みたいと思う。登攀に関しては幸運なことに八ツ峰で四本ものルートに触れる事ができた。スピードはザイルをほぐすときなど削るべきところが必ずあるのでそこを手早く行えるようにしていきたい。今回は長くても4ピッチで懸垂まで含め二時間ほどだったが行程を終えた後の疲労感はそれまで経験してきたものの比ではなかった。休めるところでしっかり休んで集中力を維持できるようにしたい。まだ積極的にコミュニケーションをとれていない場面がある。流れを読んで自分で考えるのも大切だがさっさと誰かに聞いて終わらしてしまうべきことも多い。最後に自分はクライミングという行為自体は好きだがアルパインにはそんなに魅力を感じられなかった。それは必至過ぎて楽しむ余裕がなかったからかもしれないが今後のモチベーションにも関わるのでいっぱい登って、打ちのめされて余裕を持った山男になりたい。

会原初美

夏合宿を終えて、登攀への意識が変わったような気がする。

劔岳での登攀は見渡せる景色の大きさに圧倒され、純粋に登攀が楽しいと思えた。登り終えて、一息つくと、隣のパーティーが見え、登っているのがわかる。

近くのパーティーとの「あらよ」コールも気持ちよかった。

加えて、初めてバリエーションルートも

歩くことができた。
バリエーションルートのイメージも湧かないまま臨んだため、歩ききれぬか不安が大きかったが、
いつもとは違う雰囲気のある道を歩くのは楽しかった。
しかし、今回の合宿で一番心に刻まれたことは落石への恐怖だった。
自分が落とす落石によって、人を傷つけてしまう恐怖を知り、他人が落とす落石によって
自分が怪我する恐怖を知った。私も懸垂下降中に落石を落としてしまい、
あやうく仲間に傷を負わせてしまうところだった。あの時の恐怖を忘れないようにしなければならぬと思う。
加えて、まだまだ体力や足置きが足りていないこともわかった。
登攀 5 日目は私は体力不足で沈殿してしまったり、初日の歩荷も担ぎきれなかった。
仲間は登攀 5 日目も頑張っていたし、初日の歩荷も担ぎきっていた。申し訳ないと思った。
悔しさも残った。
来年は後輩もいる。ちゃんと強くなって
剣岳に登りたい。

小山悠太

今回の夏合宿でAフェース、Dフェースの登攀2本と上半と長次郎谷のバリエーションをいきました。登攀とバリエーションの2つに分けて感想を書きたいと思います。登攀は2日目にAフェースの中大ルートにいきました。率直な感想としては怖かったです。あとから振り返っ

てもこの中大ルートを登った時が一番怖かったです。クライミングをしながら一番恐怖感を感じたときでした。そのあとに魚津高ルートを1ピッチ登りました。このときは恐怖感もそれほどなく、楽しみながら登れました。6日目にDフェースに登りました。難しさもありましたが中大ルートのときほどの恐怖感もなく、Dフェースのリッジに立った時の高揚感は凄まじかったです。いままでクライミングをしているなかで最も興奮した瞬間でした。

次にバリエーションについてです。この日は途中から小雨になり天候はよくありませんでした。ザイルも数ピッチで雨の中の懸垂下降もしました。

前田達樹

今回の夏合宿では、自分の至らなさを大いに痛感することになった。

まず、1日目の歩荷について。自分は、ザックの重さに完全にやられてしまった。背負い始めるときに腰を落とす、膝でザックを支える、等のことが徹底できず、自力で背負うのに大変苦労した。歩いている時も、初めのほうはペースについていくことができたとしても、やがて、脚に負担がかからぬよう足置きに集中するあまり遅れが出てしまった。結局、行程の半分ほどしか背負うことができず、自分の体力不足、重さに対しての弱さを大いに実感することになった。

次に、2日目源次郎尾根について。バリエーションルートは一般道ほど整備がされておらず、ガレ、ザレ場で石を落とすやすくなる。登りでは落石しないように足